



マリアン・アンダーソンの1953年の日本コンサート・ツアー：トランスナショナルな歴史

カラム, A. ケイティー

木本, 麻希子

大田, 美佐子

オージャ, J. キャロル

(Citation)

American Music, 37(3):266-329

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

journal article

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008276>



マリアン・アンダーソンの 1953 年の日本コンサート・ツアー —トランスナショナルな歴史—

ケイティー・A. カラム、木本麻希子、大田美佐子、キャロル・J. オージャ

1953 年 4 月 27 日、日本が戦後、連合軍による占領の統治から復帰した一年後に、著名なアフリカ系アメリカ人の歌手、マリアン・アンダーソンがコンサート・ツアーのために東京に到着した。アンダーソンの来日は日本放送協会 (NHK) の主催であったが、アンダーソンの滞在は、国と地方のメディアのネットワーク、アメリカ大使館当局、教育機関、そして慈善活動団体とも連携し、とりわけ社会福祉法人中央共同募金会や日本赤十字社 (JRCS)、そして国内の音楽評論家や演奏家たちなどによっても支援された。彼女は、日本の主要ないくつかのコンサート施設で演奏し、アメリカの原子爆弾が破壊した 8 年後の広島で孤児のための慈善コンサートの舞台に立ち、親善大使としての務めも果たした。アンダーソンは皇居でも演奏し、ニューヨーク・タイムズ紙は、このことを「2,600 年の歴史において初めての黒人のゲストであった」¹と報じた。アンダーソンにとっては今回がアジアへの初めての訪問であった。彼女は 1 ヶ月以上もの間、日本に滞在し、東京で数回に渡って演奏し、名古屋、大阪、広島で巡回公演を行った。その後、1953 年 5 月 27 日には、朝鮮戦争に従軍していた米国陸軍と国連軍の慰問演奏会で、彼女は韓国に短期の訪問をした。この訪問は、北朝鮮と休戦が締結される僅か 2 ヶ月前の交戦状態の最中に行われた。1953 年のアンダーソンの来日は、国務省によって主催されたアジア・ツアーより前のことと、そのツアーや元々 4 年後に開催されることになっており、日本での演奏は含まれていなかった²。

アンダーソンの演奏旅行は、新たな政治的安定を受け入れ、日本が占領から抜け出し、まだ第二次世界大戦からの傷跡を癒しつつ、実質的に国際社会へ再び参入しようとしたときに行われた。顕著な一例として 1953 年に皇太子の明仁が、6 ヶ月間の世界各国訪問を行い、日本という国新しい顔として国際的な舞台でデビューを果たしたことが挙げられる。

第二次世界大戦後、日本の復興のための連合軍による計画は、日本でよく知られていた総司令部つまり GHQ の精力的な支持によって急速な欧米化や民主化を推進するものであった。GHQ とは、いわゆる復興支援をした連合国最高司令官総司令部 (SCAP) のダグラス・マッカーサー最高司令官の連合国機関を指す。GHQ は西洋的な伝統を積極的に奨励したが、西洋クラシック音楽の演奏もまた、ヨーロッパの音楽の伝統とともに日本の強固な歴史を構築するという重要な課題に貢献した。1950 年に朝鮮戦争が勃発すると、米国政府による特需により、日本は力強い経済成長を経験し、外国人の名手たちを招聘することができるようになった。ピアニストのワルター・ギーゼキング (1953 年 3 月)、ヴァイオリニストのヤッシャ・ハイフェッツ、そして指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤン (两者とも 1954 年 4 月) のような海外の著名な音楽家たちは、外貨を文化的イベントのために使うことができた日本の新聞社や NHK によって招聘された³。このような西洋ク

クラシック音楽のスターたちは、日本の各都市で演奏し、日本の聴衆は彼らを熱狂的に受け入れた。ここで注目すべきことは、来日した音楽家たちはヨーロッパやロシア系の白人男性であったことで、当時のクラシック音楽界において、女性は主に声楽家として成功するケースが多く、黒人は概して排除されていた。

本稿は、連合国占領下における日本の広漠たる欧米化の計画に関連し、公民権のアイコンであったアンダーソンのコンサート・ツアーとアンダーソンの象徴的存在の情況を説明し、戦後の日米文化交流の重要な時期についてふたつの文化の観点を提示する。本研究は、日米の音楽学者の研究チームによって、日本とアメリカの両国で着手され、日本語及び英語の原典を参照した。大田と木本は、NHK や皇室を含む日本のアーカイブを訪問した。全国紙及び地方紙の新聞を含む国立国会図書館東京館と関西館へも赴いた。神戸大学での大田ゼミの学生は、日本語と韓国語の資料を翻訳した。オージャとカラムは、リンカーン・センター舞台芸術図書館に所蔵されているヒューロック・アトラクションズによって収集されたアンダーソンのキャリアのスクラップブックと、ペンシルベニア大学でマリアン・アンダーソンのデジタル化された写真（オンラインで入手可）の調査を行った。また、こんにちの電子資料のアクセス権の不公平さを示す一例だが、日本で閲覧し難い環境にある電子版のニッポンタイムズにもアクセスした。我々は一貫して、日米双方の方法論を尊重し、同時に連携と交渉のプロセスを生み出していった。

異文化間の共同研究の実践のなかで、本稿は、音楽学を含む人文学のスタンダードではない興味深いプロセスを生み出した。4 名の著者は、地球の反対側に居住しつつ、文書を書き進め、多くの記録メモをグーグル・ドキュメントで共有し、研究資料を保存し共有するためドロップボックスのフォルダを使用し、スカイプを通して定期的にグループ会議を開催した。ハーバード大学ライシャワー日本研究所の研究支援のおかげで、2018 年 2 月には、ハーバード大学で、研究の方向性を変化させるほど貴重な 10 日間の共同研究を行うこともできた。現地での共同研究の前に、各自が本論文の異なるセクションをそれぞれ担当し、論調を統一するためのみならず、文化的な相違を尊重しようと試み、別々の観点を相互に融合するための時間を持った。それは、非常に有意義な、満たされた経験であった。

複数の問題が相互に交差して織り成し、国境を越えた歴史を形成しているが、我々はそこで、日本でのアンダーソンの経験が、彼女への日本人の反応と相俟って、占領初期の重要な問い合わせ探究する手段を与えたことを論じている。そして、重要な問い合わせとは、強引な民主化計画の結果として、米国がいかにソフト・パワーの作戦展開を行ったか、いかにして、非ヨーロッパの演奏家が西洋クラシック音楽における権利を確保できるか、アフリカ系アメリカ人と日本人との間の人種的な関係性の複雑な歴史について、そして、日本の聴衆が黒人靈歌にいかなる反応を示したのか、ということである。日本の音楽評論家たちは、戦後の急速な変容のただ中にあって、アンダーソンの演奏解釈の重要な文化的対話者の役割を果たしていた。アンダーソンの来日は、日本国民だけではなく、(日本及び韓国に駐在していた)アメリカ人兵士たちにとっても重要であった。さらに、その存在は、日本では特に学校教材を通して伝えられたので、結果として日本の人々に影響を与え続けていた。それにも関わらず、占領に関する多数の引用文献を確認するなかで、我々の研究チームの日本人メンバーは、第二次世界大戦の記憶について、依然として日本での議論は二極化さ

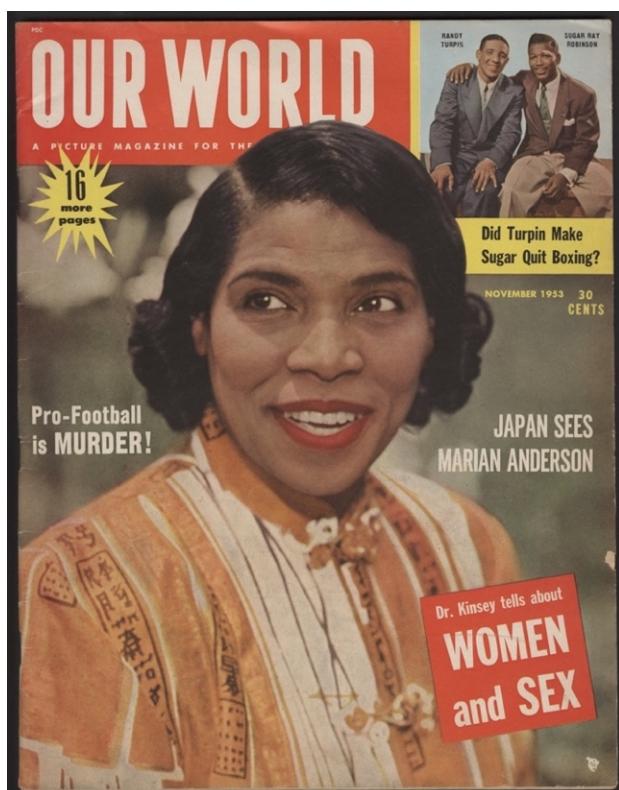
れたままであり、公共の場や学校でも議論が抑圧されてきたと感じている。大田は、この心的外傷期が「ブラック・ボックス」に保存されたものと感じており、占領下に関する研究で評価を得てきた歴史家のジョン・ダワーは、このジレンマを「ほかの何よりも敗者が望んでいたのは、過去を忘れ、過去を乗り越えることであった」⁴と説明した。本研究のアメリカチームにとって、この共同研究の経験は、一流のアフリカ系アメリカ人のアーティストが日本に訪問した際に受けた深い敬意を感じ取るものだった。もちろん、その背景には、占領軍が日本に課した、西洋帝国主義の新時代をつくるための文化の追放、そして文化の方向転換があった。

状況説明：人種、演奏会の生活、そして戦後の挑戦

人種、性別、民族的な出自の点で、アンダーソンは、占領後間もなく日本へ招聘された著名なクラシックの音楽家のなかでも際立った存在であった。アンダーソンの場合、世界的に出回ったレコードやラジオでの強い存在感を通して、来日前に評判が先行していたが、彼女の異質さはあきらかであった。「日本人は、クラシック音楽に優れた理解力を持っています」と彼女はアフリカ系アメリカ人の読者を対象とした光沢紙の写真雑誌、「Our World」の記者に答えた。「日本人は、私のレコードにも親しんでいます。実際、私が日本に到着するずっと前に、彼らのリクエストには圧倒されてしまったのです」（写真 1）。⁵特に、民間情報教育局 (CIE)が、「アメリカ音楽を聴くレコードコンサートの最初のシリーズ」を企画したのが 1948 年であった。つまりアンダーソンのコンサート・ツアーの 5 年前である。その演目には、アンダーソンの黒人靈歌の録音が何曲か含まれていた。⁶

写真 1.

Our World の表紙のアンダーソン、1953 年 11 月。ファッショング・デザイナーがアジアに対して抱くビジョンを表現して「汎アジア的」な衣装を着ている。目立った特徴のいくつかが組み合わされていて、中国服にも見えるが、関連性はわずかである。Marian Anderson Papers, Rare Books and Manuscripts, Kislak Center for Special Collections, University of Pennsylvania Libraries (hereafter Anderson Papers). Public domain.



日本の聴衆は、たびたびアンダーソンの演奏を深い次元の悲哀と結び付け、感情的なカタルシスを得た。その聴取経験は、いつまでも残って消し去れないほど見事なものであった。著名な彫刻家の舟越桂（1951年生まれ）は、彼の両親が東京でのアンダーソンの演奏会を行ったことを回想している。その出来事は家族の体験に刻まれた記憶であり、数十年後に舟越家の子供として記者のインタビューに応え、両親が来日したアンダーソンの演奏に強い感情的な反応を示したと語ったのである。舟越の両親は特に、アンダーソンのレパートリーで最も人気のある有名なドイツ歌曲、シューベルトの《魔王》の演奏解釈に感銘を受けていた。戦時中の疎開時に、舟越家は病氣で子供のひとりを失い、当時の限られた物資のなかでも高額なチケットを買い求め、両親はアンダーソンの演奏でその子を回想し、その演奏を一種の癒しとして受け止めたという⁷。芸術に精通し、東京の「ニッポンタイムズ（1956年にジャパンタイムズに改名）」の音楽批評家で、ボストン日本協会の理事長でもあるピーター・グリリもまた、子供のときにアンダーソンの東京での演奏会に行き、彼女の《魔王》の演奏が際立ったものであったと回想している。「私は決して忘れないでしょう！日比谷公会堂でアンダーソン女史の演奏会を聴いたのはまだ10歳の子供の時でしたが、とても感動しました。」とグリリはボストンでの対談で語った。

グリリは続けた：「その演奏会で《魔王》と並んで、私が最も強い印象を受けた曲は、《Swing Low Sweet Chariot》でした。当時、私は、アメリカ社会における奴隸制度や黒人について、キリスト教の死の概念や天国での復活については殆ど何も知りませんでした。しかし、私は、その歌の激しい強さを決して忘れないでしょう。アンダーソンの音楽の力と集中力は、心の内側へ向けられているように思われ、私には、あの靈歌が彼女の魂から、直接、聴衆全員の魂へと流れて行くように感じられました。」⁸

同様に、浦川宜也は、のちに著名な日本人ヴァイオリニスト、教育者となつたが、1970年代にアンダーソンの伴奏者であるフランツ・ルップと共に演しており⁹、13歳のときにアンダーソンの東京での演奏会を聴きに行った。「私の母は歌手だったので、1953年に東京の日比谷公会堂でのマリアン・アンダーソンの演奏会に私を連れて行きました。私は、アンダーソンの黒人靈歌の演奏の強烈なインパクトをはっきりと憶えています。まるでアンダーソンの声そのものが芸術であるかのように感じました。彼女の黒人靈歌の演奏は、宗教的で、私に何らかの強い精神的なショックを与えました。アンダーソンの黒人靈歌の演奏の背景には、一種の哲学があるように思いました。」¹⁰

さらに、もうひとつの日本でのアンダーソンの演奏は、京都の公益財団法人青山音楽財団理事長である田中美鈴の記憶に残っている。1953年5月6日の大阪サンケイホールで聴衆のなかにいた彼女は、アンダーソンの声の特殊性について次のように回想している。「アンダーソンの音程は、広い音域のせいか、期待するものよりも常に低かったが、歌声はヴェルヴェットのように艶やかで、演奏はとても素晴らしいだった。」¹¹

特に、現在もなお有名な、かのリンカーン記念堂での1939年の演奏会の写真を通して、米国における公民権の象徴としてのアンダーソンの卓越性が、来日へと繋がった。冷戦期の米国の国際関係にみられるように、GHQは、米国を自由の規範、すなわち模倣される

べき民主主義のモデルとして、日本人にアメリカの民主主義を推奨した。同時に、公民権運動が着実に差し迫ってくるについて、米国では人種差別や偏見に対処する圧力が強まってきた。1954年5月にブラウン対教育委員会裁判において、公立学校の人種差別が違憲であると宣言された歴史的な最高裁判所の決定とともに、その運動は始まった、というのが一般的に言われている史実である。しかし、公民権への戦いは1954年よりも数十年前に遡る。この戦いは数十年に渡って続き、歴史家に「長い公民権運動」と呼ばれるようになったが、アンダーソンの1939年の演奏会は、完全な市民権を求めるアフリカ系アメリカ人の闘争の象徴的な代表となる決定的な瞬間であった。「アメリカ革命の娘」(DAR)は、白人のみの契約の条項を引き合いに出し、当時、ワシントンD.C.の主要演奏会施設であったコンステイチューション・ホールでのアンダーソンの演奏の権利を否定した(ジョン・F・ケネディセンターは、1971年まで開館しなかった)。全米黒人地位向上協会(NAACP)による支持で急速に組織化された動員の成果もあり、アンダーソンと彼女のマネージャーのソル・ヒューロックは、リンカーン記念堂の階段で演奏会を行い、DARに対して戦略的な勝利をおさめた。75,000人以上の混血の聴衆が出席し、演奏会は、大陸の向こう側のラジオを通して何万人もの人々へと届いた。アメリカ全土で黒人と白人の両方の新聞の見出しがこの出来事を取り上げた。

14年後、日本におけるアンダーソンの演奏のために作られたプログラム冊子では、この演奏会からの写真を特集している。それは、彼女のアイデンティティが注目すべきイベントと融合されたその証拠を示していた。特に、アンダーソンとNHK会長の古垣鉄郎からの献詞が冊子の冒頭に掲載され、古垣のメッセージは、芸術を人道主義の理想と結び付けている。「あらゆる偏見や対立を超えて、すべての人々を結ぶもの、それは真の芸術の外にはあり得ない」(写真2)。¹²米国の首都におけるコンステイチューション・ホールの特異な存在を鑑みると、アンダーソンの勝利は、米国のコンサート会場全体における人種的正当性に大きな意味を持った。そして、日本のプログラム冊子のなかで写真が示した歴史は、行動する民主主義について鮮烈なイメージを与えた。コンステイチューション・ホールとアンダーソンとの奮闘が長年にわたり続いていた間、歴史的な進展が彼女の日本ツアーの直前に起きた。1953年3月14日に、彼女はコンステイチューション・ホールで人種的に統合された聴衆の前で初めての演奏会を開催した。それは、一度限りの例外ではなく、人種差別を廃止する新しいポリシーの一部として催されたのである。

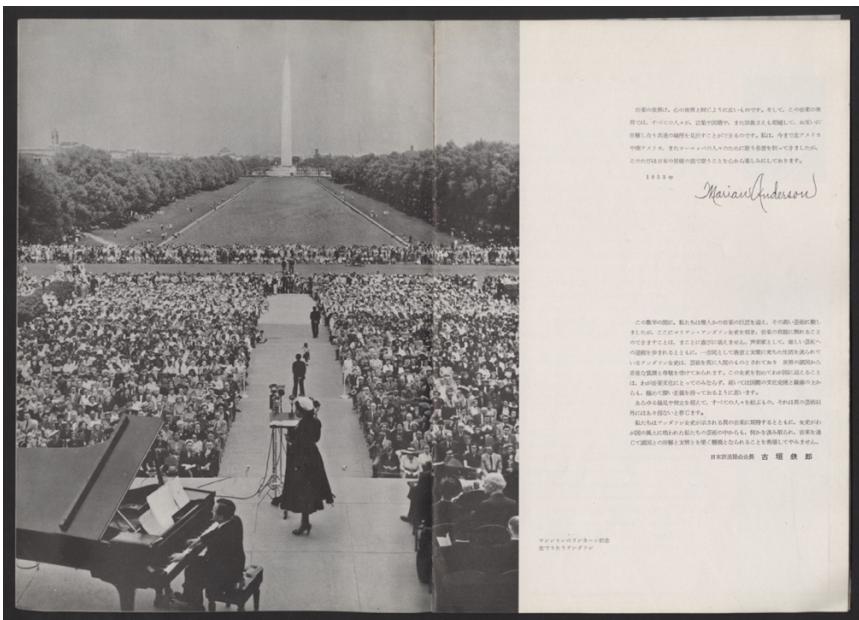


写真 2.

Vocal Recital Marian Anderson, 1953 のプログラム冊子より。プログラム冊子は、1939 年のリンカーン記念堂でのアンダーソンの演奏会の写真、アンダーソンと古垣鉄郎の献詞が含まれている。Courtesy Anderson Papers。

同時に、日本人とアフリカ系アメリカ人との関係には長い歴史があり、それはアンダーソンのリンカーン記念堂のコンサートの数十年前に遡り、彼女の日本ツアーリーの重要なコンテクストでもあった。1919 年に第一次世界大戦の終結を議したパリ講和会議で、日本政府は人種差別撤廃条約を提唱したが、この人道的条項は採択されなかった。その後、日本は、米国、イギリス、フランス、そしてイタリアの同盟国となった。歴史家のマーク・ガリキオ¹³が記録したように、1920 年代までには、「ブラック・インターナショナリズムのイデオロギー」のなかで日本は重要な地位を獲得した。10 年後、アジアで日本の侵略が激化した時でさえ、W.E.B.デュ・ボイスのような著名なアフリカ系アメリカ人の知識人は、この島国との連帯を感じ続けたのである。アジアにおける日本の支配が、ヨーロッパの植民地化政策と憂慮すべきほどに類似していることを認めつつ、デュ・ボイスは、ヨーロッパのケースとはまったく違い、日本の「計画は、征服者に対する人種的な憎しみに基づいているものではなく、被征服者（たとえば、台湾、韓国、満州など）は、日本人と血族的な関係性があるものとみなされる」。¹⁴と記している。真珠湾攻撃の直後、多くのアフリカ系アメリカ人のリーダーたちと市民は、人種的な連帯感で日本を評価し続けていた。たとえば、「黒人の兵士」は、1942 年 1 月にピットバーグ・クーリエで発行された投稿だが、当時、一般的であった人種差別的な表現を用いながらも、日本人に対する信頼を表現している。

「もし、黒人が日本人によって支配されていたなら、現在の状況より悪くなっていたらどうかとさえ疑わしく思う。個人的に私は、私たちが日本人は悪者と信じさせられているだけなのではないかと思う。日本は愛国的な市民に対して、アメリカで黒人が受けるほど

にひどい扱いをしないだろう」。¹⁵

太平洋を横断し、絶え間なく変わる人種的な関係性のなかで、日本人もこのような人種的な連帶感をもった。もっとも、人種的な態度は、特に長期にわたってみると、一貫性のあるものではなかった。20世紀の初頭、多くの日本人にとって、アフリカ系アメリカ人は白人との関係性を進めるひとつのモデルであったが、人種に対する態度は、日本の帝国主義が激化するにつれ、曖昧になった。歴史家の小代有希子は、1930年代の日本人のなかで、「アジア民族としての身体的アイデンティティ」と「ヨーロッパ民族としての精神的なアイデンティティ」の分離が深まっていることを指摘している。近代の日本では帝国主義が加速するにつれ、この「二重の人種的なアイデンティティ」が形成され、「アジア人のみならず西欧人の立場からみると、日本の地位は植民地支配として合法化された」。¹⁶結果として、第二次世界大戦前と戦中の日本政府による人種政策は、日本社会の一般的な肌の色に基づく差別とは矛盾したものであった。

アメリカ主導の日本占領は、日本人とアメリカ人の兵士つまり、黒人、白人、そして日系アメリカ人の米兵を含む他の人種のグループの間に、これまで以上に面对面接触の機会を増やすことになり、人種問題に新しい時代をもたらした。GHQは、米国における人種差別主義者の慣習に準拠し、民主化を目指す国に対して逆行的なモデルを示して、占領軍に人種差別を課した。「マッカーサーの本部に勤務するアフリカ系アメリカ人の軍人は誰もいなかった」と、歴史家のサラ・コブナー¹⁷は記している。しかしながら、実際に日本に滞在するアメリカ人の兵士と日本人女性との性的な関係については、大衆文化が注目するようになった。1952年、アンダーソンのツアーの1年前であるが、〈ごめんなさい〉という歌が日本でヒットし、アメリカ人兵士と日本人女性との「親密でおそらく不平等な関係性」に焦点が当てられた¹⁸。メランコリックな歌詞は、レイモンド・ハットリの旋律に医師のベネディクト・マイヤーが書いた。両者ともアメリカ人の兵士であった。〈ごめんなさい〉は、そもそも、アフリカ系アメリカ人の歌手、リチャード・バウアーズによって日本で録音されたものであり、その後、ハリー・ベラフォンテ、ゴードン・ジェンキンス、そしてサミー・ケイ¹⁹による録音でアメリカへ渡った。この歌は、日本民謡の〈さくら〉の引用で始まり、テンポの速いビッグ・バンドのアレンジへと転換する。その途中で、歌詞に「my Butterfly heart」が含まれ、プッチーニのオペラ《蝶々夫人》²⁰における混血人種のカップルの私生児を連想させるのである。

アメリカの女性誌『Redbook』は、マイヤーズが日本に滞在する米兵との非嫡出子たちのための孤児院に〈ごめんなさい〉の印税を寄付したと言及した。そして、1953年に日本は実際に、人種の違うカップルから生まれた子供たち、つまり、悪名高く「混血児」と称された子供たちの困難に対処していた。この問題は、これらの子供たちが学校に通う年齢に達し、国民の意識に広がり始めたため、アンダーソンの来日中に常にニュースになっていた。クリスティン・ローバックは、「子供たちは、母親の人種よりもむしろ父親の人種で単純的に識別されるだけでなく、父系の血統の定性的な相違を識別した分類システムで、日常的に「黒人」か「白人」のいずれかに分類された。」と言及している。「1950年代の日本では、非血縁者として最も強制的に定義されたのは、黒人のアメリカ人、黒人の混血児であった。」²¹これらの子供たちについて情報をあきらかにすることは社会的に

タブーであったため、彼らはしばしば孤児院や個人宅で隠されていた。占領期が終焉を迎えるまで、混血児の問題は、社会的に重要な論争としてジャーナリストや政治家によって議論されたが、どれほど多くの子供たちに影響が及ぼされるかについては意見の食い違いがあった²²。驚くべきことに、1953年4月26日の朝日新聞では、マリアン・アンダーソンに関する記事が映画『混血児』のレビューと同じセクションに掲載された²³。小代有希子の説明によると、その映画は「ヘンリーとトミー、つまり黒人と日本人のハーフの子どもで、日本国内のアメリカ軍の支配による犠牲者」に焦点を当てることで、「日本に基地を置く米軍の存在から生じる社会的な問題」²⁴を扱っていた。日本の孤児のためのアンダーソンの募金集めは、その後、朝日新聞の記事で取り上げられている。しかし、アンダーソンは混血児に対して、特別な配慮を見せたわけではなく、彼女が来日する一年後の1954年の春に来日したアフリカ系アメリカ人の歌手のジョセフィン・ベイカーほど活動的な姿勢は見せていなかった。ベイカーはいわゆる「占領期の子供たち」と呼ばれた混血の孤児のために資金集めの演奏会を開催し、個人的にも2人の孤児を養子にした²⁵。

多様な局面で、多くの日本人にとって黒人と白人の両方のアメリカ人と交流するのは、占領期がはじめてであった。アンダーソンの来日は、このような国境を超えた結び付きという総括的なコンテクストをもって行われたのである。たとえば、1953年に名古屋で開催されたリサイタルでは、聴衆のなかに、多くのアフリカ系アメリカ人の兵士がいた、と地方紙が報告している。「白いイブニングドレスの女史、背景の金びょうぶ、周囲の壁を染める青い光にブラウンの皮膚が美しい諧調を形づくる。満員の客席には、黒人駐留軍兵士の姿が多かった。」²⁶

歴史家のジョン・G・ラッセルによると、アフリカ系アメリカ人の兵士のステレオタイプは、村上龍、山田詠美、手塚治虫といった日本の作家たちの様々な小説や漫画を通して強められてきた²⁷。一方アンダーソンは、特に黒人靈歌の演奏を通して、黒という言葉の内実を表現しただけでなく、スタンダードなヨーロッパのレパートリーを演奏することで、聴衆の期待を複雑なものにしたのである。

アンダーソンの日本と韓国での旅程

1953年にアンダーソンはニューヨークから東京まで飛行したが、途中には数回の乗り換えが必要であった。アンダーソン、ツアーマネージャーのアイザック・ジョフェ、そして伴奏者のフランツ・ルップが出発したのは4月15日で、ニューヨークからシカゴ、そしてサンフランシスコへ飛び、ホノルルには翌日に到着した。ホノルルでは10日間の滞在で、2つの演奏会を開催した。その後、ウェーク島に立ち寄り、4月27日に東京の羽田空港に到着した。羽田空港では、古垣鉄郎（NHK会長）、マルセル・グリリ（ニッポンタイムズの音楽批評家でNHK国際部代表）、斎田愛子（歌手）、村田武雄（音楽批評家で英文学者）そして日本のRCAビクター代表が率いる団体から熱烈な歓迎を受けた²⁸。

（アンダーソンの羽田空港到着の写真3とアンダーソンの旅程の表1参照）

スターへのこのようないもてなしは、ツアーの全日程にわたり当然のように行われた。アンダーソンは、旅行中、日記に詳細に出来事を書き綴ったが、それ自体、彼女にとって珍しいことであった。

アンダーソンは、歓迎会での最年少の参加者の「着物を着た愛らしく幼い少女」が、彼女に花をプレゼントしてくれたことを記していた²⁹。当時、空港は、軍事輸送施設としての占領下の利用から国際的な商業拠点への過渡期であった。1953 年にアンダーソンが到着したとき、第一旅客ターミナルはまだ開発中であり、開業するまでにはあと 2 年を要した³⁰。

表 1: アンダーソンの日本と韓国での旅程表

日程	都市	演奏
4月 27 日～5月 4 日	東京	NHK ラジオ放送：4月 29 日 コンサート：5月 1 日(A)、5月 4 日(B)
5月 5 日～5月 8 日	大阪	コンサート：5月 6 日 (A) 5月 8 日 (B) (兵庫)
5月 9 日	京都	
5月 10 日～5月 11 日	広島	コンサート：5月 11 日 (D)
5月 12 日	京都	
5月 13 日	奈良	
5月 14 日	京都	
5月 15 日～5月 17 日	名古屋	コンサート：5月 15 日 (A) 5月 17 日 (B)
5月 18 日～5月 26 日	東京	コンサート：5月 19 日 (慈善演奏会) 5月 22 日 (C)、5月 23 日 (皇室)、 5月 25 日 (D)
5月 27 日～5月 29 日	プサン	軍人たちのための演奏会 5月 28 日及び 29 日 野外コンサート：5月 29 日
5月 30 日～5月 31 日	ソウル	軍人たちのための演奏会 5月 30 日 米兵のための演奏会 5月 31 日
6月 1 日～6月 3 日	東京	

※註) アルファベット A-D は写真 29 のフライヤーに掲載されている、あらかじめ決められたアンダーソンのコンサートプログラムのセットを指す。空白は、アンダーソンの演奏会がなかった日を表している。



写真 3.

日本人歌手の斎田愛子が、羽田空港でアンダーソンと挨拶を交わしているところ。同席しているのは、NHK とニッポンタイムズのマルセル・グリリ。Anderson Collection of Photographs, Anderson Papers (hereafter Anderson Collection of Photographs).

NHK 及び米国大使館主催の様々な歓迎会や晩餐会で、アンダーソンは、文化、政治の分野の指導者たちと面会する機会を得た。4月28日の来日初日には、NHK 主催の宴で著名な琴奏者の宮城道雄（1894-1956）の演奏を聴いた³¹。中部日本新聞のインタビューで、彼女は以前にシカゴで琴の音を聴いたことがあり、まさに天国にいるかのような音で、その静けさや平和な雰囲気に有難みを感じたと言及した³²。宮城の出身地である神戸新聞の記事には、東京の NHK ラジオの第一スタジオで、宮城がアンダーソンと面会したときの写真が掲載された³³。宮城は、その年の一年後のインタビューでもアンダーソンについて語り、シーベルトの《魔王》で、別のキャラクターへと変化していく彼女の声の多様な色彩感を賞賛した。彼はアンダーソンの演奏会へは来られなかつたものの、ラジオでその演奏を聴いたのである³⁴。

東京でのアンダーソンの活動拠点は、国際色豊かで文化的な千代田区の有楽町であり、銀座と日比谷公園の中間に位置していた。有楽町はまさに「空襲を免れた東京の中心街の数平方マイル」³⁵の一部であり、様々な活動で賑わい、洗練された街であった。第二次世界大戦後、日本人にとって「ファッショナブル」とは、しばしば「欧米化」を意味した。

アンダーソン一行が滞在した帝国ホテルは、1890 年の開業以来その地にあり、外国の高官や著名人が宿泊する東京の一等地として活用されていた³⁶。有楽町には、アンダーソンが 5 月 1 日に初めてのリサイタルを開催した日比谷公会堂もあった。日比谷公会堂は、1929 年に 2,070 席を有して開館し、1945 年 3 月の大空襲での被害を免れ、戦前と戦中に東京の文化的な生活の中心的な役割を果たした³⁷。有楽町地区は、1953 年まで GHQ によって運営され、占領軍の求めに応じてエンターテイメントを届けていたアニー・パイル劇場を含み、アメリカ人に支配されていた。（写真 4）



写真 4.

東京の日比谷公会堂の正面からの写真。1929 年に開館し、2016 年から修繕のために閉館した。日比谷公会堂は、アンダーソンが滞在してエレノア・ルーズベルトに会った帝国ホテルの隣に位置する。大田美佐子（撮影）、2017 年。

アンダーソンの旅程は三つに分かれ、東京での 1 週間、西へ移動して京都、大阪、広島、名古屋での 2 週間、そして最終週の東京で構成されていた。（写真 5）日本ツアーハウスの後、アンダーソン一行は、東京経由でニューヨークへ戻る前に韓国に赴き、プサンとソウルで 5 日間を過ごした。「私のスケジュールは、鉄道の時刻表のように厳密でした」とアンダーソンは、自伝で記している³⁸。昭和天皇の誕生日である 4 月 29 日午後 8 時、NHK 第一放送で最初のアンダーソンの歌がラジオで放送され、その後、9 つの演奏会が数日ごとに放送された³⁹。アンダーソンの訪問が日本のラジオ放送の最盛期と重なったことは意義深い⁴⁰。その 2 年前、NHK 会長の古垣鉄郎は、戦後のラジオ放送のためのユートピア的なビジョンを宣言した。「我々は、ラジオが世界平和と国際的な友好の確立に強力な影響を与えることができると感じています。」（写真 6）⁴¹5 月 1 日のアンダーソンの演奏会の初日のチケットはすぐに完売した⁴²。アンダーソンは日記で、「大観衆」と彼女が受け取った「たくさんの花束」について綴った。演奏後、ファンのひとりが「あなたが特別な力を發揮するために今日の新鮮なものを」⁴³と書かれたメモとともに 1 クオート瓶の山羊のミ

ルクを渡したという。食料難の折、占領下ではミルクは子供の栄養に大切な役割を果たしてもいた。5月4日には、アンダーソンと伴奏者のルップが再び日比谷公会堂で演奏した。(写真7)⁴⁴ロバート・マーフィー米国大使が参加しており、その夜にアンダーソンを祝福するために「あなたは日本へ来られた本当に最高の大使です。」⁴⁵と書き送った。

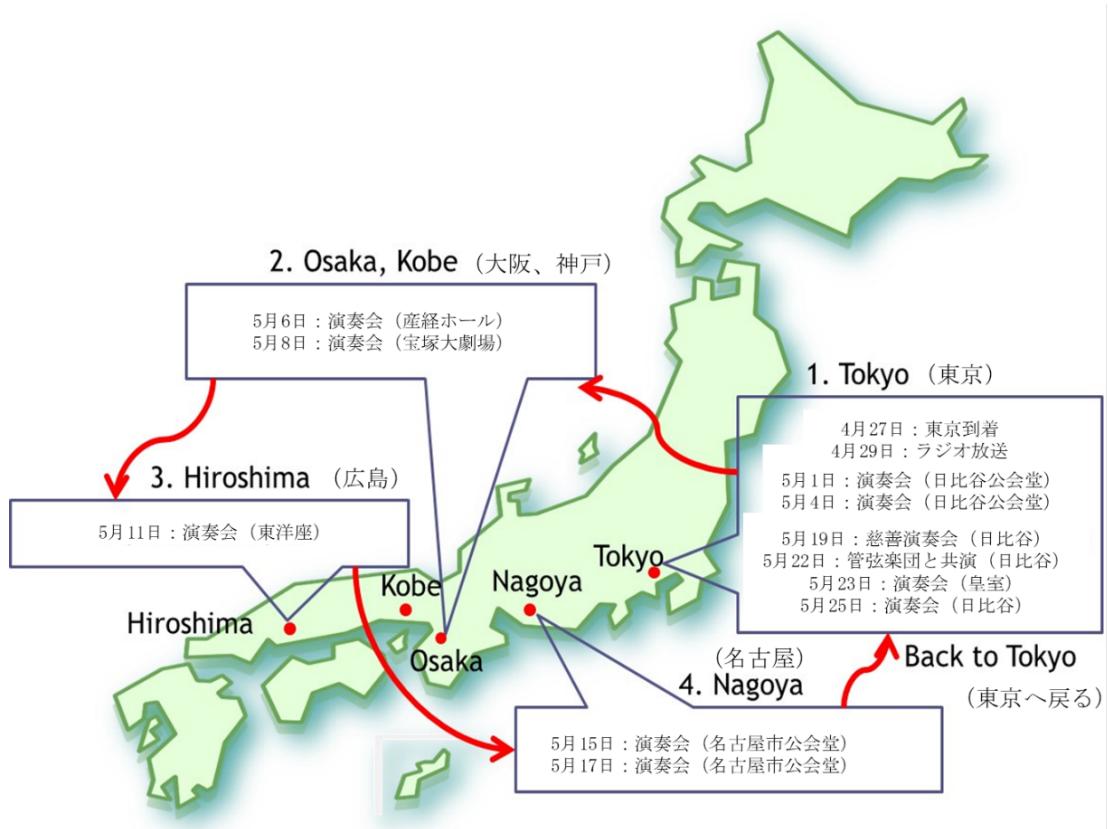


写真5.

1953年のアンダーソンの日本ツアーに関する地図。木本麻希子（作成）、2018年。



写真 6.

日本の NHK ラジオで歌うアンダーソン。NHK 交響楽団（提供）、東京。



写真 7.

東京の日比谷公会堂で演奏するアンダーソンとルップ。

NHK 交響楽団（提供）、東京。

アンダーソンは、東京の自由時間には、来日の著名人の世話をする内部関係者とともに買い物と観光をした。たとえば、5月2日には能楽堂で演奏を聴き、舞台裏に招待された。日記には「二人の役者に会い、両者が素晴らしく手の込んだ衣装とお面を付けており、ふたりがそれぞれ出演した二つの場面を観ました。」と記した。「言うまでもなく、その光景を舞台裏から見るには、靴を脱がなければなりませんでした。」⁴⁶その後、アンダーソンは、歌舞伎座の公演を観て、そこで「最も有名な役者」に会った。その人物とは、高名な尾上梅幸（1915-1995）であったと思われ、*Our World*誌でアンダーソンと一緒に写っていた。（写真 8）⁴⁷彼女の到着後すぐ、東京新聞は、アンダーソンが日本の茶道を学び、

日本の伝統的な芸術を見たいと言い、その両方の願いを果たしたと報告している⁴⁸。彼女のスケジュールはぎっしり詰まっていて、紹介された日本文化を楽しんでいるようで、靴を脱がなければならなかったことや様々な日本料理の体験について楽しかったことを日記に書き綴った。そして、「大変疲れたが幸せ」とも語っている⁴⁹。



In Tokyo, Marian Anderson visited Baibo Onoe, Japan's greatest actor, backstage in the Kabuki Theater dressing room. Miss Anderson was greatly impressed with the dramatic presentations of the Kabuki Theater, which seeks to perpetuate, with male actors only, Japanese folk lore and old traditions.

写真 8.

アンダーソンと高名な歌舞伎役者の尾上梅幸（論文の見出しでは、名前の綴りに誤りがある）。*Our World*で掲載。1953年11月、Anderson Papers. Public domain.

次のコンサート会場の最初は大阪で、大阪での公演は2回あり、東京及び主要な演奏会場で行っているものと同じ2種類のプログラムが披露された⁵⁰。「私たち8名で東京を離れて、他の都市へ移動の旅をしました。」とアンダーソンはそのもてなしを自伝に記録している⁵¹。最初の演奏会は、大阪の産経ホールで開催され、次は長い伝統をもつ女性のレビュー劇場、宝塚歌劇団の拠点である宝塚大劇場で開催された⁵²。アンダーソンの一行は、5月9日に京都で休日を過ごし、平安神宮や桂離宮もあわせて見学した。「1300年以上前に整えられた内装は、今でも素晴らしい姿をしています。オリジナルの絵画が飾られた小さなキャビネット、上質な木製の作品、言葉で言い表せない雰囲気」と日記には記録されている⁵³。リハーサルのあと、一行の男性たちは、「芸者の桜踊りを観るために午後6時に出掛けました。」彼女は世界的な著名人で人権の象徴であったが、女性としてそのパフォーマンスを観ることから外された⁵⁴。

一行は、広島へ着くまでに一日かかった。広島は、1945年年のアメリカの原子爆弾の投下からまだ復興も道半ばの重要な滞在地であった。5月11日には広島で、アメリカ軍とGHQに接収されていた元映画館の東洋座で演奏会を開催した⁵⁵。戦後に開館した東洋座は、原子爆弾から生き延びた広島の中心地にある数少ない建物の隣に建てられ、重要な文化的中心地となり、損失と復興の両方を象徴する場所となつた。演奏会のあと、アンダーソンは、前皇女で昭和天皇の四女であった池田厚子と彼女の夫の池田隆政に会つた⁵⁶。広島では、一行は有名な厳島神社へのボート観光もした。（写真9及び10）⁵⁷



写真9.

M.P.E.A.シアターの写真。占領期の1948年の広島での劇場。劇場名は、1950年に「東洋座」と改称された。アンダーソンの演奏会は、アメリカ映画『地上最大のショー』の上映期間中に開催された。2017年に現地を撮影した際に、新しい建物に示されていた写真。撮影は恵下フクミ。



写真10.

1953年に、広島の東洋座があった場所(八丁堀のショッピングエリア)に建つ新しい建物。大田美佐子（撮影）、2017年。

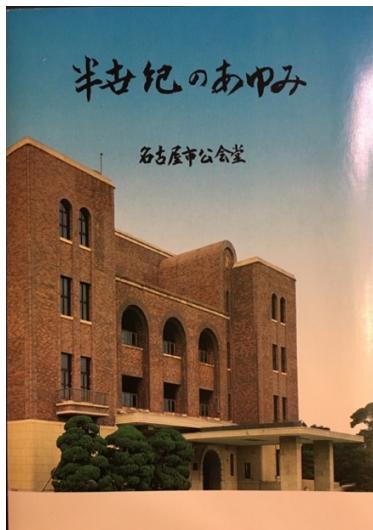


写真 11.

名古屋市公会堂の二つの写真。上の写真は、名古屋市公会堂の50周年記念の冊子『名古屋市公会堂-半世紀の歩み』の表紙より（名古屋市市民局発行、1980年）。下の写真は、2017年10月に大田美佐子による撮影。建物は改修中。



写真 12.

5月15日に名古屋駅に到着したアンダーソン、ルップ、そしてジョフェ。この写真は、新聞記事内にあり、二人の姉妹の氏名：柴山美智子（6歳）、柴山響子（4歳）が記載されている。

（中部日本新聞、夕刊、1953年5月15日）Anderson Collection of Photographs. Public domain.



写真 13.

5月15日に名古屋で日本人の子供たちから花束を受け取るアンダーソンとフランツ・ルップ。
Courtesy Anderson Collection of Photographs.

東京に戻り、NHK の演奏会が二回、契約上の公演以外の追加公演が二回あった。これらの追加公演の最初の公演は、日本赤十字社（JRCS）による日本人の孤児のための慈善演奏会で、5月 19 日に開催された⁶⁰。休憩中にアンダーソンは、「優れた社会的かつ文化的な貢献」に対して、高松宮の妃によって有功章メダルを授与された⁶¹。戦後、皇族は、孤児と貧しい子供たちの危機に配慮を示しており、アンダーソンは、キリスト教の熱心な信者であったことから、募金活動と公的意識の両方の向上のためにこの慈善演奏会を開催した⁶²。4日後の 5月 23 日に、アンダーソンとルップは皇居で御前演奏を開いた。参加したのは、皇后の良子と二人の子供であった、皇男子の義宮と皇女の清宮であり、彼らのために 30 分の演目を披露した。この演奏会は、皇室がアフリカ系アメリカ人のアーティストを接待した日本の歴史上はじめてのこと、朝日新聞とアメリカのマスコミの両方で、その出来事が強調されて伝えられた⁶³。

アンダーソンは、5月 22 日にクルト・ヴェス指揮の NHK 交響楽団とともに歌唱し、その演奏会にはエレノア・ルーズベルトが出席した⁶⁴。ルーズベルトは、1939 年のワシントン D.C.におけるリンカーン記念堂でのアンダーソンの演奏会の重要な支援者で、偶然にもアンダーソンと重なる形で、帝国ホテルに滞在した。「彼女（ルーズベルト夫人）は、私がロビーに立っているときにやって来て、私を見上げて驚いていました。」とアンダーソンは日記に書き記している。気持ちの良い挨拶を交わすと、彼女は私がどこで歌うのか尋ねました。」⁶⁵ルーズベルトもこの出会いについて、1953 年 5 月 25 日のコラム「マイ・デイ」に書いていた。「私がホテルのなかへ入って行き、最初に見た人がマリアン・アンダーソン女史でした。日本でツアーをし、偉大な成功を収めたと評判です。彼女は、今夜ここで歌うそうなので、我々は彼女の演奏を聴くつもりです。私にとっては大きな喜びです。」⁶⁶翌日、ニッポンタイムズは、冒頭ページに「二人の著名な女性の出会い」⁶⁷という見出しでアンダーソンとルーズベルトを取り上げた。アンダーソンの日本における最後の演奏会は、5月 25 日に開催された。その夜の公演後、アンダーソンは感激して、「素晴らしい素晴らしい聴衆。聴衆の少女たちから贈られた花、花、花、そして、プレゼントもありました。」と記した。（写真 14 から 17）⁶⁸



写真 14.

5月22日のアンダーソンのプログラム冊子より。NHK 交響楽団（提供）、東京。



写真 15.

東京で NHK 交響楽団とリハーサルをしているクルト・ヴェス（指揮者）とアンダーソン。
大竹省二（写真家）、Courtesy Ayumi Otake (Tokyo) and Anderson Collection of
Photographs.



写真 16.

クルト・ヴェス指揮、NHK 交響楽団と共に演するアンダーソン。

この写真には、NHK と共に演るために 1952 年に招聘された数少ないオーストリア人の演奏者とともに、オーストリアのオーボエ奏者 Jürg Schaeftlein (1929-85) が写っている。NHK 交響楽団（提供）、東京。



写真 17.

1953 年 5 月 22 日に東京で互いに挨拶を交わすエレノア・ルーズベルトとアンダーソン。

Franklin D. Roosevelt Library. Courtesy National Archives and Records Administration.

フランス・ルップもまた、帝国劇場で 5 月 24 日に独奏会を開催し、ラジオ放送もされて、東京で脚光を浴びた⁶⁹。その演奏会は、アンダーソンの東京での最後の演奏会の前日に開催され、日本の音楽批評家たちは、全体としてルップを賞賛しながらも、いくつかの粗い点を指摘したので、その評論は賛否両論であった。「ルップ氏は、有るはずの音をしばしば抜いたり...」と音楽評論家の増沢健美は書いた⁷⁰。アンダーソンは日記に「彼は、長い時間、そして、いつも練習をしていました。」と書いている。「でも、時々彼も私も望んでいたものではないことが起こるのです。彼はあまりに緊張していたので、休憩中には私は彼に話しかけました。」⁷¹

ルップは、第一に伴奏者として知られており、日本の報道機関は、アンダーソンとともに彼が来日する前から、その演奏について敬意を示していた。「アンダーソンの伴奏をするピアニスト、フランス・ルップは現代最高の伴奏者にして、ロッテ・レーマン、エリザベート・シューマンなどの伴奏者である」と、東京新聞はルップとアンダーソンの到着直後に報道している。「日本でも戦前テレフンケン、ピクターなどから彼のレコードが発売されている」⁷²と音楽評論家の鳥海一郎も同様にルップを賞賛した。「ピアノのフランス・ルップはクライスターの伴奏もしていた人。彼はアンダーソンの伴奏をするようになってから十年になるという。まことに優れた伴奏者だ。アンダーソンも良き人を得たものである。」⁷³そして、後年にルップを伴奏者として一緒に仕事をした日本人ヴァイオリニストの浦川宜也は、ルップの演奏スタイルについて以下のように述べた。

「フランス・ルップは、ドイツの伝統を継承しており、彼のピアノ演奏の音色は美しかった。ルップがピアノを演奏しているとき、その腕は、いつもリラックスしていた。彼は柔軟性のあるピアニストでもあった。私が演奏解釈の問題について意見をすると、ルップはいつもそれを受け入れてくれた。彼は作品の移調も簡単にできてしまう人だった。」⁷⁴

こうして、ルップは、アンダーソンとの共演と独奏との両方で、日本での知名度を上げた。

米国国務省によって計画された次のステージは、一行の韓国での演奏であった。アンダーソン、ルップ、ジョフェは、5 月 27 日に C-54 軍の輸送機で東京を離れた。その輸送機について、アンダーソンは、雑誌『Our World』で「巨大で素晴らしい」と記者に説明した。（写真 18）⁷⁵ヒューロックからのプレスリリースでは、それは、在韓国の国連軍司令官のマーク・クラーク将軍の飛行機であったと記されている⁷⁶。次の四日間、アンダーソンは、米国、国連、そして韓国の兵士たちに加えて、プサン、ソウルの民間人のために演奏をした。戦時下の状況は、マイクの音が飛んだり、ピアノのペダルが動かなくなったりと、挑戦的なものであった。28 日に予定された野外コンサートは、雨で延期になった。アンダーソンは日記に「その夜を台無しにしないように、私たちは、スウェーデン系の病院に行き、患者を訪問し、兵士たちのために歌いました。」と記している。そして、アンダーソンは記者に「私の外国のキャリアは、スウェーデンから始まりました。」⁷⁷と述べている。「私たちは、スウェーデン民謡を歌い、彼らはとても喜んでいました。」⁷⁸翌朝、アンダーソンは、負傷した兵士たちの二つのグループのために演奏し、午後には韓国の音楽家連盟の会員と会った⁷⁹。その夜は、「韓国国民と軍の招待客」のための代替の公演が開催された⁸⁰。大勢の群衆で、韓国の新聞は、10 万人であったと報告した。「私たち

の車は、多すぎる人だから通行ができなかった。彼らは、両端から押し合うようにして車を囲んでいた。」とアンダーソンは日記に記録している⁸¹。演奏会の終了後、警察の護衛に助けられて、彼女の一行は会場から出た。



写真 18.

韓国へのフライト前のルッピ、アンダーソン、そしてジョフェ。1953年5月27日撮影。アンダーソンは5月23日の日記に、「手続きに行って、軍服と靴を渡された。スカートの代わりにズボンをはくことにも驚いている。」と書いた。Courtesy Anderson Collection of Photographs.

ソウルで、アンダーソンは、デンマーク系の医療船を訪れ、負傷兵たちを慰問した。ヘリコプターに乗って移動しながら「アンダーソン女史は、爆撃されたり、焼失した韓国人の民家や建物を真近で見ました。」(写真 19)⁸²アンダーソンの存在は、「何千もの国連の兵士たちの心を感動させた」とダグラス・ホールは伝えている。ホールは、韓国を拠点とするアメリカ人ジャーナリストで、雑誌『アフロ・マガジン』(ボルチモアのアフリカ系アメリカ人によって刊行)の掲載のためにアンダーソンの訪問について報道した⁸³。かなりの数のアフリカ系アメリカ人の兵士たちが朝鮮戦争に従軍し、黒人系のプレスは、アンダーソンの日本の滞在よりも、韓国での活動について多く取り上げた。

ホールは、アンダーソン一行が最近まで爆撃されていた金浦空軍基地に着陸したと伝えた。前線ではその年の最も激しい戦闘がなおも続いていた。5月31日の演奏会については、次のように報告した。

「日曜日の夜にアンダーソンの演奏が受けた歓迎ぶりから判断すると、兵士たちは彼女の演奏を聴くのを楽しんでいた。アンダーソンは、5回のアンコールを歌い、多くのカー

テンコールに応えた。聴衆が望んでいたものに気づいて、彼女は最後にアナウンスをした。『次の曲目は、《アヴェ・マリア》です。』数分間、会場が拍手で揺れた...演奏会の終わりに、ひとりの兵士が、米兵ならではの語り口で、彼女への最上の賛辞を口にした。『あの女性は素晴らしい』』⁸⁴

アンダーソン、ルップ、そしてジョフェは、6月1日に東京へ戻った、そして、2日後、彼女のはじめてのアジアツアーハイド幕を閉じ、彼らはノースウェスト航空でニューヨーク市へ向かった。(写真20)



写真 19.

1953年5月30日、韓国、ソウル沖でデンマーク系の医療船Jutlandia 上で演奏するアンダーソンとルップ。US Army photo by PFC D. F. Lyons (YA). Anderson Collection of Photographs. Public domain.



写真 20.

初めてのアジアへの旅から戻ったアンダーソン。ニューヨークのアイドルワイルド空港の滑走路で。Courtesy Anderson Collection of Photographs.

NHK の主催による九つのコンサートで、アンダーソンは、それぞれ異なる作曲家のグループを取り上げた四つのプログラムを繰り返した（写真 29、および補遺 A）。プログラム「A」は 3 回披露され、バッハ、シューベルト、そしてドニゼッティやイギリス民謡が盛り込まれた。プログラム「B」も 3 回披露され、ハイドン、ブラームス、サン＝サーンス、そしてリヒャルト・シュトラウスであった。NHK 交響楽団と演奏したプログラム「C」は、マーラーの《亡き子を偲ぶ歌》、そしてブラームスの《アルト・ラプソディー》であった。プログラム「D」は 2 回披露され、マルティーニ、ブラームス、ヴェルディ、そしてドビュッシーとフォーレを含むフランスの作曲家の作品であった⁸⁵。すべてのプログラムには、日本の音楽評論家たちの間で反響が大きかった「黒人靈歌」が含まれていた。これらのプログラムには、アンダーソンの中心的なレパートリーが含まれていたと同時に、異文化間の理解について対話の重要な部分ともなったのである。

民主主義を奏でる：プロパガンダ、皇族との繋がり、そして広島

第二次世界大戦終結後間もなく、アメリカの占領軍の目的は、「非軍事化と政治改革のための占領から、民主主義へと誘導するための史上例のない実験的占領へと変質が起こった」と歴史家のジョン・ダワーが述べている⁸⁶

アメリカの理想を奨励するために、文化活動の幅広い方法が展開され、アンダーソンの来日も、こうした文化活動の複雑な関係性のなかで評価することができる。そして、このような活動は占領期が正式に終わっても続いた。1950年代に冷戦が本格化するにつれて、共産主義の脅威が高まると、アメリカは対抗するために民主主義の同盟関係を確立し、維持しようとした。マイア・コイカリは、「日本や他国に民主主義を輸出することは、アメリカ合衆国が反共を掲げて西側諸国を囲い込み、『自由主義諸国』のリーダーとして君臨し続けるうえで、特別に重要なレトリックであり、物質的な秘策でもあった。」と述べている⁸⁷。政府の支援で実現した韓国での慰問について、アンダーソンに送られたアメリカ国務省からの公式の感謝状では、民主主義には触れられてはいない。その手紙では、アンダーソンは世界の舞台に立つ模範的なアメリカ合衆国民の模範的人物と位置付けられている。

「国連と韓国の様々な病院の駐留軍での歌の慰問は、前線で戦っている韓国の人々の士気を高め、秀でたアメリカの芸術家に出会い、演奏を楽しむ機会となりました。

ここに合衆国を代表し、あなたの公共心が国際親善に役立っていることに感謝します。そして、社会と文化に対するあなたの素晴らしい貢献により、日本の天皇陛下から有功章を授与されたことにお祝い申し上げます。このような功績は、アメリカの人々に、誇りを与えるものです。」⁸⁸

アンダーソンの海外公演のうち日本での公演は、アメリカ政府ではなく NHK が招聘した。GHQ は戦後、NHK を民主的な理想に貢献するための法人として抜本的に改革した。つまり、この事実は NGO である日本赤十字社と、戦前の首長である皇室、そして米国の代表者(国務省)、これらすべてがいわゆるアメリカの価値観に基づいたプロパガンダのために投資したツアーで、彼女の来日はそのイデオロギーと大いに結びついていたのである。

アンダーソンが日本の人々にとってデモクラシーを表象していたことは、すでに彼女が来日する前にも報道されていた。1946年という早い時期に、彼女は読売新聞の読者欄のひとつ「デモクラシー教室」という記事で紹介されていた。女性読者が「民主主義なるものの本質を国際的な例を挙げて見せてください」と問うと、「レディー・フロム・ニューヨーク先生」が答えるという体裁で、アンダーソンが紹介された。この記事は占領期の連合国(プロパガンダ)のように読めるものであり、特に、当時のアメリカ合衆国における実際の人種問題の状況を映し出してもいた。

「アメリカのニグロでメリー・アンダーソンといふ歌姫がいる、彼女はアメリカをはじめ多くの国々に向かって歌ひ、幾千の人々を感動せしめている。彼女のsuchな名声はどん

な芸術家にとっても容易に得難いものだ、彼女自身も非常な困難を克服して名声をかちえたのであるが、ここに重大なことは、アメリカ政府が天才的芸術家たる彼女のため、適切な教育を受ける権利を与へたといふことである、そこで彼女は埋もれていたかもしれない才能を十分に伸ばす機会を得、それが彼女個人の幸福以上に世界を豊かにしたのだ。ここに民主主義がある」⁸⁹

このように民主主義の原理によって日本の文化を再構築するという大きな圧力のなかで、GHQ は環境を作り始めた。しかし、アンダーソンがアメリカの民主主義の賜物であるかのように紹介したもの、現実的には当時、彼女を含めてアメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人たちには完全な市民権は与えられていなかった。実際、この記事が書かれた 1946 年には、まだアメリカの軍隊にも人種差別があり、アンダーソンをはじめアフリカ系アメリカ人が白人と平等に教育を受けることもできなかった。彼女は人種的な障害に抗い、構造的な人種差別にもかかわらず専門家としての成功を収めていた。メアリー・ドゥジックが示唆しているように、自国では公民権を無視しながら、アメリカ合衆国政府は冷戦の初期に外国で民主主義を広めようとして、国際的な批判に直面した。そういう批評があったことから、実際に「人種や民主主義に関するアメリカ政府の発言に信憑性を持たせるために」⁹⁰、改革を促したのであった。緊迫した人種問題があるにもかかわらず、アンダーソンの 1953 年のツアーは、後に国務省によって主催されたものと類似点をもつていた。つまり、「著名な黒人アーティストには偏見はなく、彼らは偉大なことを達成したという点が示された」のである。⁹¹

エレノア・ルーズベルトの 5 週間におよぶ日本訪問はアンダーソンの旅とも一部重なり、より直接的な目的を持っていました。彼女は、日本の知識人たちと交流するために、アメリカの知識人交流事業の委員会により招聘された。宮内庁書陵部に保管されている 1950 年代の新聞記事の切り抜きを調査すると、彼女が民主主義を推進する役割を担っていたことは明らかであり、原爆について人道主義に基づいて対処し、日本の戦災孤児の窮状にも目を向けています。⁹² 合衆国における公民権への彼女の進歩的な立場には、彼女の訪問中にもスポットライトがあたり、日本女性にとって重要なロールモデルとして活動した。彼女は自叙伝に「事実として、女性は家庭内での縁の下の力持ちであったが、新憲法で与えられたような男性と平等な権利を持っていなかった、と私は確信している。国会、あるいは議会には 30 人の女性がいたという事実にもかかわらず」⁹³と綴っている。

ルーズベルトとは異なり、アンダーソンは日本の女性についてインタビューで尋ねられたことについて、彼女の日記にこう綴っている。「放送するために、女性についてのインタビューを受けた。四つの質問があり、ひとつは日本女性にどのような変化が必要と思うかというものだった。個人的に日本の女性を知っているわけではないので、変化についても適切な提案はできなかった。」⁹⁴ 占領期間中、アメリカ人女性は日本のジェンダー問題において大きな役割を担っていた。つまり、彼らは民主主義を説明し、家庭第一主義を勧めた。そして、アメリカ人として彼らは「日本女性の理想の教師」⁹⁵であるよう求められたのである。アンダーソンは国際的なキャリアを積んだ女性として並外れた存在であったが、報道では彼女の家庭生活が強調され、たとえば「裁縫や料理が好きで、建築家の夫にとって居心地の良い家をまもる女性」として描かれた。そのことは、冷戦の束縛や社会

の安定という物語が人々に広まるのを後押しするものだった⁹⁶。

日本を民主化するという GHQ のキャンペーンでは、キリスト教の振興とも相俟って、そこでもアンダーソンが重要な手本として想起された。1947 年から 1952 年までマッカーサーは 2,500 人ものキリスト教の宣教師を日本に派遣し、たとえば、東京の国際基督教大学 (ICU) の創立にも貢献した⁹⁷。アンダーソンに対するキリスト教側の反応は 1947 年に現れている。著述家で社会批評家でもあった坂西志保が書いた記事「祈りの人——マリアン・アンダーソン」である⁹⁸。坂西は戦後 1945 年の後半から数ヶ月、GHQ でアメリカの専門家として勤務し、一連の仕事のなかで、NHK の放送審議会の委員を務めた⁹⁹。記事の中で、坂西は自分自身がキリスト教徒であると明かし、アンダーソンが幼い頃に父を亡くしたというような彼女の苦労話に光を当てた。1939 年のリンカーン記念堂でのコンサートにも言及し、黒人靈歌の演奏を特に宗教的なテーマのレパートリーとして取り上げた。8 年後、その記事は日本の子供たちのために、民主主義を振興するための教材として書き直された。¹⁰⁰

天皇裕仁に対する GHQ の立場は、戦後のもうひとつの重要課題であった。歴史家ケネス・ルオフは、戦後すぐに、皇室のイメージを新しく刷新するプロセスが始まるが、新しい「象徴天皇制」が正当性を獲得するのは、1952 年の占領終結から十年経ってからだと述べている¹⁰¹。これらの変化の時期はちょうどアンダーソンの訪問の時期と重なっていた。裕仁は 1926 年に天皇に即位し、第二次世界大戦の軍国主義と帝国の拡張期に国家元首であった。皇室が日本社会の安定に不可欠と考えられていたため、マッカーサー軍司令官は軍事法廷で裁き追放し、退位を勧めることもなく、天皇を支援するという驚くべき立場をとった。つまり、「占領軍当局は、天皇の名において戦われた聖なる戦争そのものと天皇個人を切り離したが、そればかりではなく、新生民主主義国家の中心に天皇を再び据えつけた」のである¹⁰²。占領期の間とその後も、アメリカとの和解について、皇室一家は重要な役割を果たし、皇室自体の肯定的なイメージを積極的に作っていた。

アンダーソンはツアーの最中、くりかえし皇族と交流し、公のセレモニーにも同席した。5 月 19 日のコンサートは日本赤十字社のための慈善コンサートであり、その四日後には皇居のなかで内輪だけの演奏会が開催された。これらのふたつの演奏会は、事前に組まれていた NHK 主催のものとは別だが、とても重要な東京での演奏会だった。そして、アンダーソンと皇室との交流が、日本赤十字社 (JRCS)への支援にも繋がった¹⁰³。慈善コンサートでは広島の戦災孤児への寄付を集めたが、同時にそれはアンダーソンと戦後の日本赤十字社に求められた新しい、民主主義的なイメージを象徴していた。休憩の時間には、天皇裕仁の弟の妻であり、日本赤十字社の名誉副総裁でもある高松宮妃が、アンダーソンに有功章と特別会員のメダルを授与した。当時、日本赤十字社の総裁は島津忠承であった¹⁰⁴。歴史家の Sho Konishi は、19 世紀に皇室は日本赤十字社¹⁰⁵ のパトロンの役を引き受けることによって、「倫理的な地位と大衆性」を獲得したと述べている。この役割は、皇室が統治者というよりリーダーになった占領期にも続けられた。(写真 21)

写真 21.

5月19日に東京で開催された慈善公演の際に、高松宮妃がアンダーソンに日本赤十字社の有功章を授与しているところ。本記事はニューヨークのイディッシュ語の新聞 *Forward*に掲載された。Anderson-Hurok Scrapbooks. Courtesy The Forward Archive. 同じ写真がバージニア州の *Journal and Guide* 紙(1953年6月6日)などのアフリカ系アメリカ人の新聞や日本の新聞でも紹介された。「日赤から有功章--アンダーソン女史の慈善興行」日本経済新聞, 1953年5月20日



アンダーソンは有功章を授与される以前から、すでに何人かの皇室のメンバーに歓待されていた。つまり、皇室がアンダーソンをサポートすることは、占領期に試みられたように、日本人にとって皇室をもっと身近で寛容なイメージにするための努力の表れであった。アンダーソンの来日当時、当時の皇太子明仁は初めての海外訪問をしていたが、そこにはグローバルな舞台で日本の地位を高めたいという狙いもあった。そして国内では、女性皇族が文化大使としてアンダーソンと交流をしていた。たとえば天皇裕仁の次女、鷹司和子(1929-89)は、アンダーソンが日本に到着すると、夫と一緒に4月28日のNHKの歓迎会でアンダーソンを迎えていた。京都では、皇后の妹で、東本願寺の法主、大谷光暢(1903-93)の妻、大谷智子(1906-89)がアンダーソンを案内した¹⁰⁶。

アンダーソンは皇居を訪問し、日本が西洋化されるなかで、どのように古い伝統を残してきたのかを学んだ¹⁰⁷。5月23日の日記には、その午後「私たちが皇居に着くと、雅楽と舞が披露され、太古の昔を垣間見たようだった」と書いている¹⁰⁸。午後2時には今度は演奏を披露する側になり、皇后良子、ティーンエイジャーの子ども二人(義宮と清宮)と皇室メンバーのために、黒人靈歌とシューベルトを30分間ほど披露した¹⁰⁹。その時のこと

を次のように書き綴っている。

「2時に皇后が到着、そして間も無く何曲か歌うために会場に入った。皇后は二人の若い子どもたちと一緒に座り、中央には仕切りがあり、その両側に四、五十名ほどの男女が左右に別れて座っていた。演奏が終わると、古垣氏が皇后のもとに呼ばれ、フランツと私

が贈り物を受け取った。私は木彫の能役者を頂いた。」

天皇のもうひとりの娘、池田厚子(1931年生まれ)は5月11日に行われた広島のアンダーソンのコンサートに夫婦で訪れた。広島はアメリカが投下した原爆による壊滅的な状況から再建に奮闘している最中で、アンダーソンの登場は彼女自身にとっても聴衆にとっても意味のあるものだった。広島のコンサートはNHKが主催したアンダーソンのコンサートで、皇室メンバーが臨席した唯一のコンサートだった¹¹⁰。広島の至る所で、アンダーソンはあたたかく迎え入れられ、黒人靈歌のメッセージでもある抑圧と苦難の克服が、特に都市の再建と重ねて受け止められた。NHKの代表もアンダーソンとともに旅をしたが、NHK広島自体も原爆で被害を受け、局員38名を失った。それは広島放送局全職員の15パーセントにあたる数であった。20名のNHKの職員が爆心地から5キロ北に行った原中継局に逃れ、その日の放送を続け、公共放送の役割を果たしたという¹¹¹。アンダーソンの来日時には、未だ広島は物理的に人々の心情的にも再建の途上であり、近代的な「平和都市」を具現化しようとしていた。経済復興の希望にとっても、まだ建設途中であった広島平和記念資料館へ観光客を惹きつけることが重要であった¹¹²。

アンダーソンは1950年代に広島に招かれた多くの著名なアメリカ人のなかのひとりだった。歴史家のラン・ツヴィゲンバーグの記述では、原爆投下にもかかわらず、広島と米国の関係は概して前向きなものであり、日米の関係性は都市のアイデンティティにとっても「特に重要な側面」であったという¹¹³。広島でアンダーソンが歌った日には、広島アメリカ文化センター(ACC)を訪問した。アンダーソンは館長のアボル・ファリダ・フツイとその妻アグネス、そして浜井晋三広島市長と挨拶を交わした¹¹⁴。合衆国政府により運営されている広島アメリカ文化センターは、交流の場と情報提供を目的としてその前年に広島で開館した。当時の広島の公共設備の状況、つまり、「広島市中のほとんどの建物がそうであったように、そのセンターはあまり冷房が効いておらず、近代的なアメニティーがなかった」¹¹⁵。広島アメリカ文化センターは、アメリカの最新の雑誌や映画上映、コンサート、展示、アメリカ文化に関する講演会などを開いていた。館長フツイの娘ファリダはその時代の思い出を本に綴っており、アンダーソンが訪問した広島の様子を伝えている。ファリダは、広島の公立小学校に通う、クラスで唯一のアメリカ人で、日本語もマスターし、琴も習った。

「父の事務所のあった広島アメリカ文化センターや図書館は、100メーター道路(平和大通り)の広大な建設現場の隣にあり、浜井市長による、原爆による破壊に抵抗するような勢いを以て、平和を肯定するかのような景観が広がっていました。当時の工事現場は、掘れば遺骨や子供の溶けたお弁当等が出てくる状態でした。犠牲者の魂が込められた形見を平和記念の展示品として集めるのに大変な努力があり、手でがれきを取り除き働く人々を見る父の目には涙が溢っていました。

日本の経済奇跡はまだ数年先で、仕事は不足していました。たとえば、平均的な人はお湯が使えませんし、車はなく、冷蔵庫やテレビもありません。多くの娯楽もありませんでした。人々にはかろうじて食べるためのお金があり、映画チケットを買えるのはわずかな人たちだけでした。したがって、無料のアメリカの文化センター・プログラムは一般的な

生活水準のギャップを埋めることになりました。

父は芸術家と講演者を引き入れ、館内にはアメリカの様々な雑誌や展覧品をおき、コンサートや映画上映などのイベントを催いました。また私たちの裏庭でもご近所さんたちをよんで日本語字幕を備えたアニメやドラマを上映しました。広島の人々はアメリカ人をもっと知りたがり、アメリカ的儀式を見るために毎朝、私たちの家の前に集まりました。

「行ってきます」と出かけ際にキスする私の両親。日本の子供たちは親とキスしません。」

116

広島アメリカ文化センターを訪問した後、アンダーソンはリハーサルをして、午後7時には完売したコンサートで歌った¹¹⁷。地元紙の批評では、その晩に彼女は声のトラブルがあったことが書かれたが、その過密スケジュールと旅続きの生活では無理もなかった。しかし、批評によっては不調ではなく別の側面に着目し、彼女の神品である黒人靈歌(記事では「黒人奴隸の贊美歌」と説明されている)の演奏や、彼女の人生の「イバラと苦難の道」とそこから彼女を解放した民主主義の力について報道した¹¹⁸。

アンダーソンの旅程には、戦災孤児であふれていた都市の孤児院を訪ねる計画は含まれていなかった。広島では、原爆のために四千から五千もの戦災孤児が残された¹¹⁹。直接訪問をする機会はなかったものの、アンダーソンはその時代の他のアメリカ人と同じように、資金面で孤児院の援助をした。ニューヨークのサタデー・レビューの編集者ノーマン・カズンズは、1949年8月に戦災孤児の里親施設を訪ねた時のことを報告した。彼によれば、アメリカの読者からの寄付は1950年の1月までに、71名の戦災孤児を養うのに十分なだけ集められたという。このようにして、日本の戦災孤児のために、アメリカからの寄付のネットワークが築かれていた¹²⁰。

ペンシルベニア大学のアンダーソンのアーカイブには似島学園の前に並ぶ子供たちの写真が含まれている。広島の中心から離れた似島は、「子供たちの島」と呼ばれていた。写真には学園長の森芳麿からの感謝の手紙が添えられていた。1953年8月6日、アンダーソンがアメリカに戻ると、森は学園の子供たちの様子について英語で手紙を送った。

「今日は広島に恐ろしい原爆が投下されて8年を迎えます。私たち日本人は、もう二度と広島の悲劇を繰り返さないでほしいという思いで、この日を平和の記念日として祝っています。この孤児院には190名の孤児たちが原爆によって亡くなった魂のやぐらで力なく暮らしており、親の姿を思ってはすすり泣き、世界の平和を心から祈っているのです。

私たちの孤児院には、広島の音楽高校に通っていた孤児がいて、あなたが広島で歌われた時、彼らも聴きに行き、あなたの素晴らしい歌に心打たれたときいています。私の娘、和子もあなたの歌を聴いた3人の子どものひとりです。

広島の孤児たちに多くのご寄付をいただき、その優しさに感謝いたします。私の孤児たちは27万円を受け取りました。我々の孤児院は、あなたが送ってくださったお金をどのように役立てるか、教員と孤児たちで何度も話し合いました。調子が外れたピアノがあるだけなので、グランドピアノを買うか、あるいは孤児たちに家を建てるかのどちらかで迷いました。結論としては、子どもたちのための美しい家を建て、あなたの優しさを永遠に心に刻むために、その家を「アンダーソンの家」と名付けようと思います。まだその設計

図をお送りすることができずに残念ですが、建設が終わったら、子どもたちの家の写真をお送りします。」¹²¹

アンダーソンの資料が示すその写真には、建物の前に教師と子どもたちが立ち、建物の前には「Anderson's Children Hall」の文字が掲げられ、別の写真にはギター、ハーモニカ、タンバリン、アコーディオン、スネアドラム、バスドラム、ヴァイオリンとシロフォンなどを演奏する子どもたちの姿が写っていた。こうして、西洋化は子どもたちによる吹奏バンドにまで発展した(写真 22 と 23)。



写真 22.

森芳麿に設立された広島湾似島にある孤児院、似島学園の子どもたちと職員。入り口の戸扉の上に「Anderson's Children Hall [アンダーソンの子供ホール]」と書かれている。Courtesy Anderson Collection of Photographs.



写真 23.

西洋の楽器を演奏する似島学園の子どもたち。Courtesy Anderson Collection of Photographs.

アンダーソンの資料には、長崎の孤児院、マリア園の園長、シスター・マリア・グラシアからのお札の手紙も含まれている。1953年10月10日、シスター・グラシアはアンダーソンへの感謝の気持ちを「素晴らしい贈り物です・・・日本の戦災孤児たちにとって」と綴った後、「あなたの寄付で本棚、読書室の机、それに子どもたちのリズム楽器を買いました。子どもたちは歓声をあげ、飛び跳ねて喜んでいます。本当にありがとうございます。」と続けている¹²²。マリア園は1898年に開園したイエズス会の施設で、レンガ造りの洋館の孤児院に40名の孤児が住んでいた¹²³。（写真 24）



写真 24.

長崎にある戦災孤児院のマリア園で、アンダーソンの寄付で購入した西洋の楽器を演奏する子どもの音楽隊。Courtesy Anderson Collection of Photographs.

マリアン・アンダーソンと日本の音楽批評：相互の出会い

東京の羽田空港に到着してすぐ、アンダーソンは、記者会見を開き、ドイツ歌曲の演奏者としての経験を示した。彼女はルップと3年前に共演したミュンヘンとベルリンでの演奏会を回想しながら、「私は、ドイツの人々の前で歌ったとき、大変満たされた気分になりました。」と記者に伝えた¹²⁴。ニッポンタイムズは「この有名な歌手はドイツ歌曲、特にシューベルトの歌曲が好きだ」¹²⁵と報告している。この一流のレパートリーによって、アンダーソンは自らの芸術的な地位を実証しただけでなく、日本と歴史的かつ政治的にも強い結び付きのある音楽を際立たせた。日本人は、長年に渡ってヨーロッパの芸術、特にドイツの芸術に敬意を払ってきた。そしてその文化的な結び付きは、二つの国が枢軸国に属したときにも深まった¹²⁶。19世紀に、日本人は富と軍事力の象徴として、ヨーロッパ様式のマーチングバンドを組織し始めた¹²⁷。1872年に施行された学制という教育法令のあと、西洋の歌（唱歌）が学校で教えられた。主として、ラファエル・フォン・ケーベル

(1848-1923) やアウグスト・ウンケル (1868-1944)¹²⁸といったドイツ人の音楽教師の影響により、教科書や歌曲集では、ドイツの作曲家の音楽（モーツアルト、ベートーヴェン、シューベルト、ワーグナー）がフランスやイタリアの作曲家の音楽よりも好まれた。第二次世界大戦中、ドイツ音楽は、両国間の軍事的な結び付きを与えるものだったので、日本では評価された。同時に、日本人は、英語の歌詞をもつ音楽だけでなく、ほとんどのアメリカ音楽、特にジャズ音楽とスティーブン・フォスターの曲を禁止した。アンダーソンの場合、来日のオープニングの祝砲として、ドイツのレパートリーへの愛情を示すことで、彼女の評判について残されたままの中心的な問題を先取りしようとした。つまり、アフリカ系アメリカ人の女性の天賦の資性が、いかに説得力をもってドイツ人によって作曲された音楽を演奏し得るか、そして人種とレパートリーは、いかに深く関係しているのか、という問い合わせである。

1953 年には、アンダーソンは、レコードとラジオ放送を通じて、すでに日本でよく知られた存在であった。RCA ビクターは、アンダーソンの歌声をますますグローバルな商品にしていったのである。ニッポンタイムズの定期的な寄稿者であったアメリカ人評論家のマルセル・グリリ (1905-1990) は、顕著な例外であった。というのも、グリリは、ニューヨーク、ワシントンその他の場所で、アンダーソンの演奏を「15 年間」見聞きした経験があったからである¹²⁹。しかしながら、日本の軍事上の野心が高まり、戦時中の国家が内向きへと転換していた間に、たいていの日本人にとって、アンダーソンは、米国及びヨーロッパで名声を得てきた演奏家たちの世代を代表した存在であった。

1950 年代初頭、まさにアンダーソンのツアーが始まる前に、日本でアンダーソンのレコード入手できる可能性が徐々に変化していき、同時に気持ちを高めるような彼女のプライベートな話題が日本の音楽雑誌の特集で取り上げられた¹³⁰。1950 年には、アンダーソンの多くのレコードが、音楽雑誌『音楽の友』で紹介された¹³¹。7 月号にヨハネス・ブラームスの《5 月の夜》、9 月号にスティーブン・フォスターの《ケンタッキーの我が家》、そしてジェームズ・プラントの《なつかしのヴァージニア》（両方とも、アメリカの「民謡」として議論された。）、そして 11 月号にはブラームスの《アルト・ラプソディー》が掲載された。1951 年に音楽批評家の牧定忠は、日本の雑誌『ディスク』で戦後のヨーロッパ及び米国におけるアンダーソンの人気について書いた。その時点でも、牧はアンダーソンのレコードの入手が制限されていることを報告した。「アンダーソンのレコードはアメリカ合衆国では本当に数多く発売されているのに、日本ではまだほんの僅かしか聞けない。」と牧は述べている¹³²。牧は、アンダーソンのような新進の西洋クラシックの芸術家のレコードに遭遇し、日本人が第二次世界大戦中にその演奏に触れられず、遅れをとったことを嘆いた。

しかし、わずか 1 年後、さらにアンダーソンのレコードが日本の市場に出て、音楽批評家の寺井昭雄が「アンダーソン旋風」と提唱するに至った。『レコード芸術』の初期の発刊号の記事で寺井は、人種的な観点でアンダーソン評を書いているが、それは彼女の来日中に繰り返し問題とされる論点であった。「彼女の演奏は、音楽構造の解釈によってではなく、彼女の声そのものの特性から、とても魅力的である。」と寺井は述べている¹³³。彼は「声の暗さ」について指摘し、それがどれほど黒人靈歌やスティーブン・フォスターの歌曲に生かされているかについて述べた。それと同時に、劇的で堂々とした態度で 3 つの

異なる役割を使い分けるアンダーソンの《魔王》の解釈を評価した。

1952 年に村田武雄は、アンダーソンに関する別の記事を『レコード音楽』で発表している。村田は、その一年後、東京の日比谷公会堂でのアンダーソンのオープニングコンサートの後に討論会を主催することになった人物で、日本人のクラシック音楽の普及に貢献した著名人であった。1952 年の記事で、村田は、技術は主要な問題ではないとし、むしろ「人間の存在そのもの」¹³⁴を表現する彼女の力量を論じ、アンダーソンの声の個性について強調した。1953 年にアンダーソンが羽田空港に到着したとき、村田は、アンダーソンを歓迎する代表団のなかにいて、記者会見に出席した。記者会見の間、村田は、日本の田舎でさえ彼女の演奏が聴かれていたことを述べて、《なつかしのヴァージニア》のアンダーソンの人気について言及した。村田は、アンダーソン本人に、彼女のレコードが日本でよく知られていることを伝え、そのニュースを聞いて彼女が喜んだと語った。（写真 25）¹³⁵



写真 25.

『レコード藝術』の表紙のアンダーソン、1953 年 6 月。

アンダーソンが、東京だけでなく日本のいくつかの都市を訪問したことから、地方紙と全国紙の両方で、アンダーソンの演奏会が驚くほど詳細に報じられた。それは、日本におけるアンダーソンの評判の深さと広さの証拠であった。1953 年 4 月から 5 月（補遺 B の日本の地方紙と全国紙におけるアンダーソンの記事一覧を参照）にかけて、マリアン・アンダーソンに関する計 30 の地方紙の記事が東京、名古屋、大阪、神戸、そして広島で発行された¹³⁶。音楽批評家の意見は、西洋クラシック音楽のレパートリーと黒人靈歌の演奏に関して賛否両論であった。1953 年の日本の新聞記事が報じたように、アンダーソンの

シューベルトの《魔王》の演奏は、特に議論の対象となった。たとえば、朝日新聞の名古屋版では、日本人の批評家がアンダーソンのシューベルトの《魔王》の演奏は、劇的すぎると述べた¹³⁷。朝日新聞大阪版でも鳥海一郎(1906-62)によって同じことが書かれた。それは、匿名で発行されたが、その批評のタイトルは「美しく危険な先例——アンダーソンのシューベルト」とされた。

「彼女の歌の中で特に注意しなければならないのはシューベルト歌曲の唱法である。7日付本紙夕刊の会談でも明らかのように彼女は歌の意味内容を率直に熱烈また劇的に唄い出す。これはオペラや他のイタリア歌曲などでは当然のことだがシューベルトではひどく奇異に感ぜられるのだ。というはわれわれはドイツ・リードというものは意味内容よりも歌の言葉となっている詩が主体で、詩と音楽の結合したものだと教えられてきている。だから意味内容はひかえ目におさえて言葉の美しさを表面に出したゲルハルト・ヒッシュ（1952年來日）などを理想的なリード歌手と考える。ところがアンダーソンはリードをも他のラヴ・サングなどと同様に詩をとび越えて内容に直接に迫る。」¹³⁸

鳥海は、アンダーソンのシューベルトの《魔王》の演奏が、「情熱的」で「劇的」であると表現しており、それは、当時の日本の批評家の評価の枠組みを示すものであった。彼は、アンダーソンと著名なドイツのバリトン歌手のゲルハルト・ヒッシュとを比較し、多くの日本人の批評家の解釈方法の一例を示した。それは、僅か1年前にヒッシュが来日して演奏したこと、ドイツとの密接な文化的な結び付きによって左右されてきた日本人の演奏の聴き方だったのである¹³⁹。シューベルトに関するヒッシュの解釈は、戦争前にイギリスの音楽評論家が書いたように「相応な表現の抑制」として知られていた¹⁴⁰。しかしながら、鳥海は、「彼女のテクニックは、ドイツ語が母国語ではない国において受け入れられるのかもしれない。」とアンダーソンの演奏に疑問を投げかけた。しかしながら、アンダーソンのような有名な芸術家であれば、このような解釈が許され得るが、他の歌手はそのような方法にならうべきではないとし、「もし（彼女の解釈が）遠慮なく模倣されれば、ドイツ歌曲は汚されるであろう」と警鐘を鳴らした¹⁴¹。

もうひとりの音楽評論家の山根銀二（1906-1982）もまた、ドイツ歌曲に関するアンダーソンの解釈の問題を提示し、彼は、アンダーソンが黒人靈歌でより大きな成功を収めたと主張して説明した。山根の主張は、ドイツのクラシック音楽が「普遍的」な価値を伝えていると宣言している。彼にとって、アンダーソンは、その普遍的な音楽性という領域のなかでは、何かに欠けるものであった。

「予期にたがわず、黒人靈歌がたいへんうまい。それに独特なものようだ。やはり深く徹するところがあるからだろう。庶民的宗教的で、魂の懃々としたものがきかれ、土のかおりがする。その自然人らしい感じ方の中にこの人の特徴があるようだ。したがって、そのほかのシューベルトやバッハは、その側面から近づかれている限りでよいところもあるが、それでおおいえぬ更に普遍的な音楽性の意味ではモノ足りない点がなくもない。」¹⁴²

「普遍的な音楽性」という言葉で、山根銀二は、ドイツ人の音楽家の美的理想を条件として、日本人の聴衆にとって共通するイメージを喚起した。歴史家のキーラ・サーマンは、アンダーソンがソリストとして、自分のアイデンティティの中心にリートを位置付けることで、「まさしく音楽史のなかのもっともドイツ的なジャンル」をレパートリーとしていることを指摘し、「黒人のリートの演奏は、ドイツ音楽の演奏を通して黒人性を主張し、黒人の表現のより豊かなスペクトルを聴き手に認識させることで、アフリカ系アメリカ人の歴史を示している。」と続けている。アンダーソンの 1953 年のツアーを鑑賞した日本人の批評家のなかには、この「より豊かなスペクトル」と対峙し、彼女の音楽から聴き取れる異質さによって喚起された積年の聴取上の期待に向き合うものもいた。¹⁴³

吉田秀和（1913-2012）による批評は、アンダーソンに対する日本人の評論家の反応のなかでも際立っていた。ハイカルチャーのドイツ的な基準と関連させて彼女の演奏を評価した山根とは対照的に、吉田は文化的な相違を尊重し、日本的な伝統の観点から、彼女の異質さを表現しようと試みた。吉田は、東京に生まれ、1946 年に刊行された雑誌『音楽芸術』で連載した、モーツアルトの評論で知られた人物である。彼は、日本でクラシック音楽の聴衆が増えつつある時代、最も著名な音楽評論家のひとりとなった。吉田は、1948 年に開設された「子供のための音楽教室」（東京の名門校である桐朋学園大学の母体）の創始者のひとりでもあった。1954 年に、彼は初めての長期の海外旅行をし、1971 年に NHK の人気ラジオ番組である『名曲のたのしみ』の司会を始めた¹⁴⁴。アンダーソンに関する吉田の主張は、長文で洞察力に優れているものであった。少々長い引用だが、確認しておきたい。

「『音楽の世界は心の世界と同じ位広い』とアンダーソンはいっているが、この人の初日をきいて、私はまさにそれを思った。歌の世界だけでも、実にひろく、さまざまの歌がある。今、東京できくアンダーソンは、声の美しさより、その変化の多様さで目ざましい。『七色の声』をもつというのもあながち誇張でない位。そこにはオーボアの鋭い高音から、クラリネットの中音、バスーンの深みと一種のうつろさをもつ低音がある。『死と乙女』の死の声には、古いインカ芸術のあの表情と、緊張の不気味な共存があったし『魔王』の子供の絶叫には、おしわられた、シャガれ声さえ巧みに交えられる。この手法は黒人靈歌でもみられ、一種の雑音性の利用として、外国の歌手からきかされるのは珍らしいが、東洋の我々には親しいものである。声域と声質の異常にひろい変化の間をぬって、時々音程が定着しないことがあるが、彼女は全身に歌をみなぎらせて、ステージに堂々と立っており、私はそこに「歌のふるさと」の一つを、身内にもっている人の自信を感じる。黒人靈歌というものの、私には批評がましい何事もいえない。こういうものかと思う。これは種族の血液の歌であり、これを世界の人々に向って歌い上げることこそ、彼女の大きな使命と光栄なのであろう。有頂天から暗い絶望を託した祈りに至るまで、これはまさにヨーロッパでもなければ、日本でももちろんない。その深い肉感性は、むしろ万人のものとして淨められるのに抵抗し、郷土的、種族的なものに密着したままの姿でステージに上ることを望んでいるかのようだ。そして私は強くゆさぶられながらも、歌が自分の心の随所にみちてこないことを感じる。ショーベルトやバッハは、かなり独特なものだ。結局マリアン・アンダーソンのようなすぐれた歌手にして、なお国際性と種族性と藝術性と、この三つの融合

について問題は未解決のまま残っている。これはまた私たち日本人の問題でもあるのだ。」

145

吉田の考察は、アンダーソンの芸術性に関する比較文化的な聴き方を反映したものであり、同時代の音楽評論家にとっても注目すべきものであった。日本が急速に欧米化され始めた時代に、吉田は、戦前の「ブラック・インターナショナリズム」のひとつのかたちを形成するアフリカ系アメリカ人の問題と、民族的な連帯を融合させ、新しい芸術的なコンテクストのなかで、日本的な特性をも認めようと試みた。音楽学者のニーナ・サン・エイズハイムによって表現された「音の黒人性」という概念を見ると、吉田は、エイズハイムがそれを定式化したように、「声の響きにおける黒人性」を突き止める事例を示しており、彼は、アンダーソンの演奏の様式をドイツ的な規範から区別して、いかに人種的な相違があるかという観点で捉えようとしている¹⁴⁶。

一方、アンダーソンは、自信を持って、《魔王》の解釈の合理的な理由を展開し、日本での複数のインタビューで彼女自身の思想を語った。朝日新聞名古屋版からの質問に対して、最も好きなリートは、シーベルトとブラームスで、なかでも選ぶとしたら《魔王》と答えた。

「私はあれを自分が、その詩から感ずるままに正直に歌ったのです。ドイツ歌曲は感情をひかえ目に歌わなければいけないとか、そういったことは考えていないのです。あの歌は子供と父、また死の神で互に激しい心をもって語り合い、さらに歌の地になっているものと四通りの声を必要とする。それをそのままに歌い出すのが本当ではないでしょうか。」

147

ここで重要なのは、アンダーソンの指摘は、声の響きという人種に基づいた見方ではなく、解釈の感情的かつ劇的な側面に完全に焦点が当てられていたことである。

ドイツ歌曲のアンダーソンの解釈は、日本では論争を巻き起こしたが、彼女の黒人靈歌の演奏は、彼女の強みとして音楽評論家に評価され、日本人の批評家は、アフリカ系アメリカ人としての彼女のアイデンティティとレパートリーとを結び付けた。アンダーソンの人種は日本では特に際立っており、そこで批評家は、彼女自身の個性と、演奏家としての彼女の強みがどのように関係しているのかを理解しようとした。同時に、吉田が示したように、アンダーソンが自分たちの非西歐文化についての何かを明らかにする方法についても、注視していたのである。

黒人靈歌は、音楽批評家の野村光一（1895-1988）が東京で主催した注目すべき座談会での主要な話題であり、アンダーソンと3人の有名な日本人歌手：アルトの四家文子（1906-1981）と三枝喜美子（1921-2000）、そして、テノールの菌田誠一（1905-1986）が座談会に呼ばれた¹⁴⁸。程度の差こそあれ、これらの歌手たちは日本に輸入されたヨーロッパのクラシック音楽の代表者であった。なかでも四家は特に有名で、戦時中は、クラシック音楽とポップスの両方を演奏して注目されていた。彼女は1943年に、日本語でベートーヴェンの第9交響曲を録音しており、ポップスでの最大のヒットは〈銀座の柳〉（1932）であった¹⁴⁹。三枝は、東京で有名な教師であったイタリア歌手のディナ・ノタ

ルジャコモ（1950年没）に学んだ¹⁵⁰。菌田は、現東京藝術大学の前身である東京音楽学校を卒業し、海外から来日した優れた歌手、ヘルマン・ヴーハーペニヒ（1884-1969）のもとで1935年から1939年までの間と戦後に再び学んだ。（写真26）



写真26.

4月28日NHK第一スタジオで主催されたアンダーソンの歓迎会。アンダーソンは、日本人の歌手（川崎静子、関鑑子、長門美保、柳兼子、斎田愛子、笛田和子、佐々木禎子、柴田喜代子）そして日本で仕事をしていたヨーロッパ人の声楽教師（マルガレーテ・ネトケ＝レーヴェとディナ・ノタルジャコモ）と会った。日本人の歌手のなかには、1952年に創立された東京二期会オペラの創立メンバーもいた。アルト歌手の斎田愛子は、到着時に羽田空港でアンダーソンに挨拶をした人々のなかにいた。（写真4を参照）写真は、1953年7月に『音楽の友』で紹介された。この号には、数枚のグラビア写真が含まれており、ページ番号が付けられていない。

座談会の間、これらの歌手たちは、黒人靈歌に特に関心を示し、彼らの質問は、1950年代初期におけるこのレパートリーのグローバルな普及の限界を思い起こさせるものであった。菌田は、アンダーソンが自筆譜から演奏したことに触れ、どのようにして自筆譜を手に入れたのか質問した。アンダーソンは、黒人靈歌の旋律は最も重要な部分で、彼女自身がその歌をピアノと声楽用に編曲することも多く、その後、出版社が出版するべきかどうかを決定すると答えている。

野村は、新しい黒人靈歌が最近も創作されているかどうかを尋ねているが、アンダーソンは、黒人靈歌には新しい創造というものはなく、むしろ長い歴史があると答え、その目的は、黒人奴隸の哀しみを癒すためのものであったと付け加えた。

野村は「スピリチュアルに特別な歌い方というのはあるのですか」と尋ねた。アンダーソンは「要するに黒人の場合ではそれは自分自身の歌ですし、又それ以外のほかの人がス

ピリチュアルズを歌うときにはその雰囲気とか、気持ちに入って歌うことが必要なので、特別な歌い方というようなものはないのじゃないでしょうか」と答えている。三枝は、1年前に来日した白人のアメリカ人でワーグネリアンのソプラノ歌手ヘレン・トラウベル（1899-1972）による黒人靈歌の演奏についてのアンダーソンに意見を尋ねた¹⁵¹。特に、三枝は、演奏における人種とその解釈の正統性の関連を質問した。アンダーソンは、トラウベルに対し敬意を持って答え、彼女が「黒人靈歌」に大変関心を持ち、その音楽の本質を学ぼうとして、南アメリカへ旅行したことを話した。トラウベルは「二グロ・スピリチュアルズの精神」と意思疎通をしたのだ、とアンダーソンは認めた。

四家は、黒人靈歌を自分でも演奏することを述べたうえで、黒人靈歌を歌う歌手について尋ねた。アンダーソンは、他の歌手が黒人靈歌に関心をもっていることに対して、「それは非常に嬉しいことです」と答えた。

この座談会は、日本を拠点にした著名な日本人の歌手やヨーロッパから来た声楽教師にとって、アンダーソンと交流する多くの機会のひとつであった。他の機会としては、4月28日にNHKによって主催された彼女のための歓迎会があった。マルガレーテ・ネトケ＝レーヴェ（1884-1971）も出席していた。彼女は、1924年から東京音楽学校で声楽の教授をしていたドイツ人歌手であり、ヒッシュ、トラウベル、そしてエルナ・バーガーを含む最近来日した歌手のグループの一員として、アンダーソンについても継続的に執筆していた。そして、各演奏家の特徴的な声の質を描写するために、著名な巨匠画家たちを引き合いに出した。アンダーソンはレンブラントと比較できるとし、彼女の声は「多彩なパレット」を表現し、「神秘的で深い感情」をもたらすものとした¹⁵²。少数だが、若い音楽家たちも、来日したアンダーソンと会う機会を得た。1953年のツアーで、アンダーソンに花をくれた少女のひとりには9歳の中村絃子もいて、彼女はのちに演奏家として国際的に高い評価を得た¹⁵³。

全体として、これらのイベントや出版物は、アンダーソンが日本人の歌手たちとともに、別の視点からクラシック音楽の解釈を捉えるための好機となった。つまり、人種、音楽のジャンル、そして声のタイプと関連し、長年にわたって培われた確信に挑戦する好機であった。そして、彼女の来日は、日本人がより多くの音楽世界に開かれた時と重なり、アンダーソンと日本人の歌手や声楽教師たちとの交流は、日本人に強いインパクトを放った。しかし、批評家の大田黒元雄は、鋭く観察し、アンダーソンの歌唱スタイルと声の質は、広く人気のある魅力ではあったものの、完全に知識人を満足させることはできなかった、と述べた¹⁵⁴。

アンダーソンと日本国民の間の交渉を進めたもうひとつの力となったのは、アンダーソンの来日を綿密に報じたニッポンタイムズであった。マルセル・グリリは、ドイツの芸術歌曲の彼女の解釈に反発する日本人批評家に反論するような、いくつかの特集記事を発行した。1897年に初版が発行されたニッポンタイムズは、国内の最も著名な日刊の英字新聞であり、グリリは、1952年にこの新聞の音楽評を書き始め、40年近くにわたり批評を執筆し続けた。グリリは、若いときイタリアから移住して帰化したアメリカ市民の立場で、英語を読む日本の聴衆向けに批評を書いた。第二次世界大戦の間、グリリと彼の妻のエリーゼは、ワシントンD.C.の戦略情報局(OSS)に勤務しており、1945年には東京で文官として占領軍当局に転属された。彼の息子のピーターによると、グリリは、決して日本語が

流暢にはならなかつたが、その代わりに英語、ドイツ語、フランス語、そしてイタリア語を介して日本人の知識人たちの社交サークルと交流した。1952年に彼は、ニッポンタイムズに加え、NHKの国際部とクラシック音楽の部門で仕事をし始めた。グリリは、自ら「このコンサートツアーのためにアンダーソンを日本へ連れてくるのに尽力している」と説明した¹⁵⁵。要するに、グリリは、文化的な仲介者であった。

アンダーソンが到着する2週間前に、グリリの妻エリーゼは、ニッポンタイムズでアンダーソンについての特集記事を発刊した。エリーゼは、歴史家で批評家としてよく知られており、彼女は、日本の屏風、巻物、そして他の芸術形式に関する多くの本を執筆した。エリーゼによるアンダーソンの人物紹介では、アンダーソンのキャリアにも影響したジム・クロウの人種差別の実際に対して遠回しに言及し、恵まれないスタートから、現代のシンデレラとしての彼女の活躍について語った。エリーゼにとって、アンダーソンの立身出世物語は、「こうした奇跡が時々起こる新大陸の伝説のようなもの」であった¹⁵⁶。

一方で、マルセル・グリリは、アンダーソンの演奏がなぜ一貫してそのような深い感情的な反応を生み出したのかを伝えようと努めていた。彼の視点は、幾分人種に基づいていたが、国家遺産としての期待を映し出していた。5月5日の記事で、彼はアンダーソンを「アメリカの黒人」と認識し、ドイツのレパートリーを演奏するにあたって、彼女の権利を確立するために奮闘した。グリリは次のように書いた。「わりに最近のコラムで書いたが、『中央ヨーロッパ』の雰囲気に浸っていない人々が、ドイツのリートに投影された相応の『気分と感情』を理解することはまずもって不可能である」。そして、彼はアンダーソンが羽田空港で、ドイツの聴衆との関係性について語った意見を一部取り上げて、こう続けた。

「マリアン・アンダーソンは、このような不可能と思えることにも存在する可能性の証明である。アメリカのニグロがこれらの歌曲に、彼女の演奏を聴くドイツ人とオーストリア人が心を奪われるような、共感と理解をもたらしているのである....。私にとってこの芸術家の資質が独特で超人的であると思われるのは、人間の共感の奥深さである。それは、彼女が選ぶレパートリーの音楽の最も深い人間性の根源へ浸透し、同じように彼女という人間全体で聴衆を完全に包み込んでしまう。」¹⁵⁷

4日後の記事でも、グリリは、稀有な才能で幅広く成功を収める芸術家を生み出すその構成要素を表現しようと努めていた。「十分に成熟した歌手が舞台に立ち、その結果として生み出される傑作は、3分の1が自然性、3分の1が芸術性、3分の1が人のなかの神性としか言いようがないものであると私には思われる。」しかし、ひとりの演奏家が3つのすべての要素を持つことはめったにないと述べて、次のように続けた。「多くのオペラ歌手は、はじめの2つの要素を持っており、たまには、輝かしい自然の声だけが飾り過ぎず響き渡るときがある。」¹⁵⁸グリリは、アンダーソンが3つの要素の才能を持つ稀有な芸術家のひとりであるとして、白人歌手のロッテ・レーマンやエリザベート・シューマンと比較している。アンダーソンの場合、アフリカ系アメリカ人の音楽家ならば天賦の才を持つと考えられてきた長い歴史に抗おうとしても、「自然に恵まれたもの」である言語と「人の神性」という超人的な才能を發揮して、人種的なイメージが浮かんできてしまう。

そのような構えは、人種的に授けられた音楽の才能ともいえ、訓練をして得られるものではない。彼女の最も熱心な支持者のひとりが書いたエッセイにおいてさえ、アンダーソンの異質さは、人種的なものと無関係としては語られなかつた。

もっとも、グリリの記事の一番魅力的な側面は、読者にアンダーソンの演奏の普遍的な聴き方を示したことであった。彼の信念は、アンダーソンという歌手が、聴き手が完全に歌の特別な雰囲気やアイデアに包み込まれたと感じるほど、つまり「歌曲が生まれてくるまさにそのルーツに到達したと感じるほど、奥深く音楽作品を理解している」というものであった。それから、彼はレパートリーに関する彼女の包括性を分析した。「それは、レパートリーであるひとつひとつの歌曲に対する彼女のアプローチから発せられる感情である。その感情は、他の作品よりも、黒人靈歌から強く発せられるかもしれない。ある夜には、『魔王』からもはっきりと聞こえるかもしれないし、別の機会には、『故郷の空（ライ麦畑で出会ったら）』から晴れやかに発せられるかもしれないが、彼女が歌うすべての歌曲のなかにはいつも、彼女自身の特別なメッセージと深く心に秘めた魅力を感じるのである。」¹⁵⁹

結：日本におけるマリアン・アンダーソンの反響

アンダーソンは、日本の歴史にとっても重要な時期に来日した。そして、来日後は、才能豊かな歌手であり、著名なアフリカ系アメリカ人として尊敬の念を集め、その来日は日本の文化史の一部にもなった。同じ時期に別のジャンルのアフリカ系アメリカ人の芸術家たちも日本ツアーを行っている。1953年にはデルタ・リズム・ボーイズが5月に来日し、11月にはエラ・フィッツジェラルド、ベニー・カーター、ロイ・エルドリッジ、ジーン・クルーパ、オスカー・ピーターソンなど、人種混合のジャズのスターたちが来日し、12月にはルイ・アームストロングが来日した¹⁶⁰。すでに述べたように、ジョセфин・ベーカーは1954年4月に来日している。レナード・デ・ポーア率いるデ・ポーア合唱団は1954年に1月に来日し、批評では先に来日したアンダーソンの演奏と比較された。デ・ポーアはアカペラで歌い、バッハから20世紀の作曲家までとレパートリーが広い。アンダーソンとの座談会を企画した批評家の村田武雄は、『音楽芸術』誌上で、アンダーソンの黒人靈歌の演奏と彼らの演奏を比較し、彼らの演奏を技術的に素人であると批評した¹⁶¹。デ・ポーアはホール・ジョンソンによる黒人の合唱の歴史を発展させたが、その演奏スタイルは、ピアノ伴奏で歌うアンダーソンの黒人靈歌の演奏とは異なり、ヨーロッパのクラシックの枠組みからは遠かつた。

1950年代半ば以降には、クラシック音楽の名手たちがたくさん来日した。アンダーソンも引き続き優れた芸術家として言及され、合衆国の公民権運動が激しくなるにつれてその存在感も増した。たとえば、1955年に発刊された戦後10年を振り返る日本のグラビア誌では、ユーディ・メニューインとともに戦後來日した二人の大物演奏家として、アンダーソンが取り上げられた¹⁶²。1955年は、アンダーソンが最初のアフリカ系アメリカ人の歌手として、メトロポリタン歌劇場でデビューした年であった。しかし同時に1955年には、アラバマで白人のバス運転手に対して、自由にバスの座席に座ろうとしたかどで、ローザ・パークスが逮捕され、ミシシッピでは白人女性に口笛を吹いたとして十代の若者、

エメット・ティルが殺害された。そのような時期に、アンダーソンの物語が日本の学校の教科書に取り上げられたのである。1957年、中学校の歴史教科書では、アンダーソンは道徳的勇気を教える人物像であった¹⁶³。その二年後、小学五年生用の別の教科書では、彼女の物語は「差別を乗り越えて」という章で紹介された¹⁶⁴。アンダーソンが教科書に採用された事実は特に注目に値する。つまり、日本人にとってのアンダーソンとは、六週間のコンサートツアーをした来日アーティストに留まらない、象徴的な意味をもっていたのである。

1959年に、アンダーソンの物語は自伝『アンダーソン』の邦訳出版を通して、ふたたび日本を魅了する。英語の原本は3年前に出版されていた¹⁶⁵。翻訳された自伝の書評は、1954年に神戸で設立された黒人研究学会 (Japan Black Studies Association=JBSA) の創立メンバーのひとり、古川博己によって機関誌『黒人研究』誌上で発表された¹⁶⁶。アメリカ合衆國の人種を取り巻く状況に照らして、アンダーソンの成功を「例外的」であるとし、人種的偏見に関する彼女の消極性に疑問を呈し、その寡黙さを論評するべく、彼女の自伝から文章を引用している。たとえば、「白人と黒人」と和訳された原文 22 章「ハイクラスとロークラス」に書かれた、ジム・クロウ法についての彼女の考え方を引用している。

「私は、ホテルではいつも自室で食事をとることにしている。そうしたいからしているだけのことである。ほかの場所で食事をしたいときは、もちろん出かけていく。しかし、ホテル側では、私に自室で食事をしてもらったほうが、つごうがいいのだろうと推察している。もちろん、私がこの問題でたたかおうとするなら、問題になることはたくさんあるだろう。しかし、そんなことは私の性に合わないことだ。私はいつでも、自分が立ち去ったあとに来る黒人のひとたちに、すこしでも居やすくできるような印象を残しておくことを、私のつとめであると考えている。」¹⁶⁷

古川はこうしたアンダーソンの人種的偏見についての控えめな態度を情熱的な公民権運動の活動家、ポール・ロブソンと比較して厳しく批判した。アンダーソンの書評が掲載された同じ号には、ロブソンの自伝についての論評も掲載された。1978年には、アンダーソンの自伝は日本の中学校や高校の英語教科書にも引用された¹⁶⁸。

その後の数十年間、アフリカ系アメリカ人の音楽家たちもクラシック音楽界でチャンスを持てるようになり、日本の批評家たちはアンダーソンの後継者について書くことで、アンダーソンを思い出していた。1961年に、小倉友昭は、米国からの旅の報告で、アフリカ系アメリカ人がクラシック界よりもジャズ界で成功しているのは事実だが、クラシック音楽のアンダーソンの名声もクラシックだけでなく、彼女だから表現できる黒人靈歌の演奏の影響が大きかったと述べている。そして、日本人はアフリカ系アメリカ人のジャズミュージシャンとの間で、相互に尊重し合っていると書いた¹⁶⁹。

1982年に木村英二は、「新西洋音楽事情—黒人オペラ歌手にまだ差別はあるのか」という記事を書き、カーネギー・ホールで行われたグレース・バンブリーやシャーリー・ヴァーレットによりアンダーソンの80歳の誕生日を祝う演奏会のことを取り上げている¹⁷⁰。1997年に上地隆裕はアジア系やアフリカ系の人口の増加で、アフリカ系やアジア系の音楽家たちが増えてクラシック界全体の人種構成が変わると予測しているが、マリアン・ア

ンダーソンは、歌手と作曲家を中心としたこれまでのアフリカ系アメリカ人の簡潔な音楽史のなかでは重要な人物として位置付けられている¹⁷¹。

アンダーソンにとっても、来日している間に彼女と知り合った人々にとっても、1953年が重要な意味をもつたのは、音楽の交流と人種に関する問題意識が高まっただけでなく、新たな友情を芽生えさせ、人間の優しさという点でも共鳴しあっていたからである。言葉の壁や文化の違い、戦争の影と占領にもかかわらず、そのツアーはアンダーソン自身と彼女を迎えた両者にとって、相互に豊かな経験をもたらした。その後何年もの間、アンダーソンは古垣会長の家族との手紙のやり取りが続いた。東京から離れて彼女のツアーに同行した NHK 局員について、アンダーソンは「私の家族」と呼んでいる。(写真 27 と 28)¹⁷²そのアンダーソンの「私の家族」の一員でもある通訳者の水原文枝は、アンダーソンがアメリカに帰国して二週間後、来日の意味を振り返って以下のように書き綴った:

「あなたがいなくて寂しいです。その生き生きとした優雅さ、正確さ、そして繊細な理解力と他の人への思いやり。こんなにも素晴らしい機会を与えて頂いたことに毎日感謝しています。優雅さや謙虚さ、思いやりも、まだ存在しているのだとわかりましたし、それが素晴らしい、美しい美德だということもわかりました。戦時中、特に戦後、人々が再び社会に復帰をしようとしていた時、これらの美德が踏みにじられ、若い世代は『取れるものならすべてを手に入れ、自分の能力より多く素早く取ろう、さもないと取られてしまう』という考え方で育ってきました。私もそんな考えに陥っているのではないかと不安だったのです。私自身の体験でもあるのですが、誰だって自分の家やそのために働いてきたすべてのものが爆弾で一瞬のうちに灰になってしまえば、辛く当たるし自分勝手になってしまうものだと思っていました。でも、あなたはゼロから始め、そのなかで、思いやり、優雅さ、勤勉さ、謙虚さを忘れないように葛藤し、時に感謝さえしているのですね。あらためて、あなたに神のご加護がありますように。そして、謙虚な姿勢、高貴さ、思いやりにあふれた素晴らしい人間性をお示しください、感謝しています。私もあなたという良いお手本がいるおかげで、少し優雅に、謙虚になれました。」¹⁷³

何よりも、アンダーソンのひと月におよぶ日本での滞在は、共感と癒しという人間的なふるまい満たされていた。時代としては、めったにない歴史的な正念場でもあった。つまり、占領期のアメリカによる統治と国新しい始まりの狭間でバランスをとり、仲間内では、より安定的な関係性を築いていくという希望のある時代であった。日本人は戦争の影響と敗戦の結果としての文化的再構築という深い喪失感のなかにあったが、アンダーソンと彼女を迎えた日本人の人々との間には、平和に太平洋を横断する交流が生まれ、それは賞賛すべき例となった。来日から二年後、NHK の開局 30 年を祝うメッセージの録音を依頼され、アンダーソンはそのなかでこのツアーについて、「私のなかで、もっとも思い出に残っている旅、経験のひとつです」と語っている¹⁷⁴。彼女の言葉は外交的な儀礼でもあるが、残っている録音の記録からは、その誠実な思いが聞こえる。アンダーソンと日本で彼女を迎えた人々、広い意味での仲間 – 日本の音楽家たちや批評家たち、GHQ や NHK の人々、皇室の人々など、こういった人々との絶え間ないふれあいと、彼女の演奏が聴衆に与えた力強い印象。日本のアンダーソンは要人として迎えられ、彼女もそれに応えて丁

寧に応対した。そうして、相互に理解することを模索していたのは明らかだった。彼女の演奏の深い感情と彼女の人間性からくる純粋な力は、日本の聴衆の魂に深く語りかけた。その結果として、彼女の来日を語り、記録した驚くほど多くの論評が、日本の雑誌や新聞に掲載され、インタビューが紹介され、ラジオが放送された。日本の批評家や音楽家とともに座談会にも呼ばれた。こうして、アンダーソンと日本の音楽家たちは、アフリカ系アメリカ人であれ、日本人であれ、どのようにして非西洋の演奏家たちが、ヨーロッパの規範との特別な関係性を生み出せるのかを探究したのである。1950 年代の日本の聴衆は、ドイツ・リートよりも黒人靈歌に馴染みがなかったが、それにもかかわらず、アフリカ系アメリカ人であるアンダーソンのレパートリーには心を奪われたということを明かしている。こんにち、西洋のクラシック音楽は、教育と演奏、そしてマルチメディアの普及というグローバルなネットワークのなかで繁栄している。その世界的な枠組みでの相互依存は、こうした豊かな異文化交流に端を発する。1953 年のマリアン・アンダーソンの日本ツアーハイライトはその国境を超えた多面的な歴史に、特筆すべき 1 ページを刻んだ。

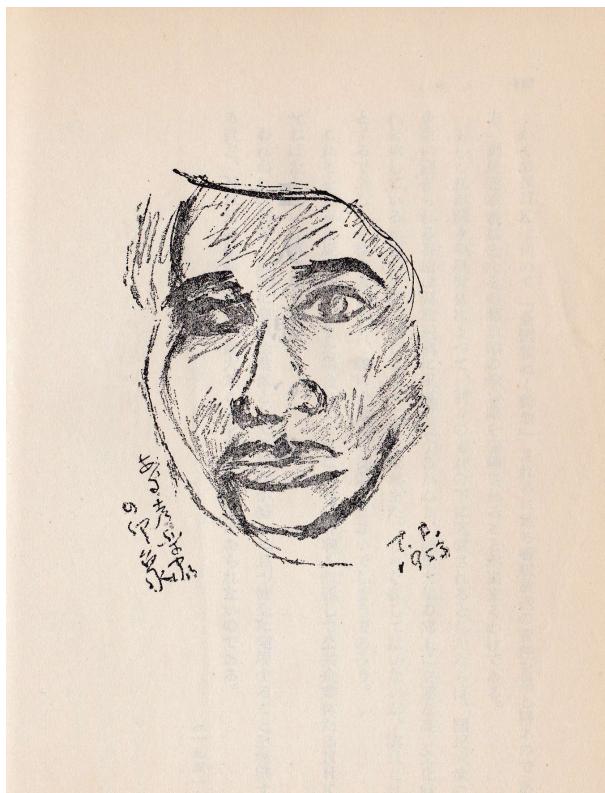


写真 27.

NHK 会長の古垣鉄郎によるアンダーソンのスケッチ。アンダーソンは、ここでは個人名が明らかにされておらず、イラストには、「ある声楽家の印象」というタイトルが付けられている。『東京の窓』(東京: 宝文館, 1954), Public domain.



写真 28.

アイザック・ジョフエ（後列の左から 2 番目）と日本人の同僚のグループとともにいるアンダーソン。右から 3 番目の女性は、おそらく水原文枝で、NHK の代表者でアンダーソンの日本での演奏ツアーの期間中にアンダーソンに同行した。Courtesy Anderson Collection of Photographs.

Toscanini said, "A voice like yours is heard only in a hundred years."

Internationally Famous Singer

MARIAN ANDERSON

Coming to Japan

NHK

VOCAL RECITAL SCHEDULE

Fri., MAY 1.	Tokyo Hibiya Public Hall "A"	Fri., MAY 15.	Nagoya Public Hall "A"
Mon., MAY 4.	Tokyo Hibiya Public Hall "B"	Sun., MAY 17.	Nagoya Public Hall "B"
Wed., MAY 6.	Osaka Sankai Hall "A"	Fri., MAY 22.	Tokyo Hibiya Public Hall "B"
Fri., MAY 8.	Osaka Sankai Hall "B"	(with NHK Symphony Orchestra)	
Mon., MAY 11.	Hiroshima Toyo-za "D"	Mon., MAY 25.	Tokyo Hibiya Public Hall "D"

PROGRAM "A"

J. S. Bach:	Komm, außer Tod, etc.
Schubert:	Der Erlkoenig, etc.
Donizetti:	O mio Fernando from "La Favorita"
English Folksongs:	Sweet Nightingale, etc.
Negro Spirituals:	Wide River, etc.

PROGRAM "C"

Beethoven:	Leonora Overture No. 3, (Orchestra)
Mahler:	Kinderotenlieder
Brahms:	Rhapsodie fuer eine Altstimme
Mozart:	Symphony No. 41 "Jupiter" (Orchestra)

PROGRAM "B"

Haydn:	She never told her love, etc.
Brahms:	Die Mainacht, etc.
Saint-Saens:	Mon coeur s'ouvre a ta voix from "Samson et Dalila"
Strauss:	Morgen, etc.
Negro Spirituals:	Honor, honor, etc.

PROGRAM "D"

Martin:	Plaisir d'amour, etc.
Brahms:	Vier ernste Gesange
Verdi:	Pace, pace, mio Dio from "La Forza del destino"
French Songs:	by Debussy, Faure, Saint-Saens
Negro Spirituals:	Go down, Moses, etc.

Under the Auspices of NHK (The Broadcasting Corporation of Japan) and Radio Service Center.

Admission (Tokyo Only): ¥1,500, ¥1,000, ¥800, ¥600 (for Student).
Booking from MARCH, 14, at Hibiya Public Hall, Play Guide, Nihon Annalisto (Ginza Mitsukoshi) etc. (May 1st and 4th Concerts only)

Sibelius said, "The roof of my house is too low for your voice."

写真 29.

このチラシは、日本でのコンサートツアーのための 4 つのプログラムの簡略化した一覧である。Hurok Attractions, Inc., compiler, "Marian Anderson [scrapbooks]," volume 1 (of 2), Performing Arts Research Collections, New York Public Library. 詳細は、補遺 A のプログラム一覧を参照。

ケイティー・A. カラム

ハーバード大学音楽史専攻博士課程在学中。準備中の博士論文 *To Look After and Preserve: Curating Musical America, 1905-1935* では、20世紀初頭に聴覚と視覚を通して語られたアメリカ合衆国の音楽生活史を研究している。同大学アメリカ史研究所チャールズ・ウォーレン・センターの研究助成を受け、アメリカ音楽協会(SAM)からマーク・タッカー賞及びマージェリー・レーヴェンス博士研究フェローシップの両方を授与されている。

木本 麻希子(きもと まきこ)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士研究員。博士論文「セルゲイ・プロコフィエフの音楽の暗号と芸術性—《ピアノ・ソナタ》におけるラインとコードのアナグラム」にて博士号(学術)を取得。クラシックのピアノ演奏領域での専門的な実技経験を基盤としながら、主にプロコフィエフのピアノ音楽に関する楽曲分析と演奏解釈を中心に研究を行う。

大田 美佐子(おおた みさこ)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 人間表現系講座 准教授。東京生まれ。東京芸術大学で音楽学を修め、学習院大学大学院でドイツ演劇の修士号を取得。博士論文は「芸術の要請と社会的効果 1930年代へと向かうクルト・ヴァイルの音楽劇」(ウィーン大学, 2001)。文化史的、あるいは越境的視点から西洋音楽史の研究教育を行い、2003年から読売新聞を中心に関西圏の音楽批評で活動。現在、日本語で新しいクルト・ヴァイルの評伝を執筆中である。

キャロル・J. オージャ

ハーバード大学音楽学部教授。著書 *Bernstein Meets Broadway: Collaborative Art in a Time of War* (2014)は、アメリカ音楽学会(AMS)のアメリカ文化音楽賞を受賞し、*Making Music Modern: New York in the 1920s* は、アメリカ音楽協会(SAM)のルーヴェンス賞を受賞。アメリカ音楽協会理事、ニューヨークフィルハーモニックのレナード・バーンスタイン・スカラ・イン・レジデンス、ハーバード大学音楽学部長を務める。現在、マリアン・アンダーソンとクラシック音楽の演奏の人種差別撤廃に関する著書を執筆している。

謝辞

執筆者一同、次の同僚、学生、及び研究機関に謝意を表します。—ハーバード大学ライシャワー日本研究所の アンドリュー・ゴードン(元所長)、テオドル・C・ベスター(元所長)、メアリー・C・ブリントン(所長)、ギャヴィン・ホワイトロー(エグゼクティブ・ディレクター)、そしてステイシー・マツモト(アシスタント・ディレクター)。ハーバード大学ライシャワー日本研究所からは当研究グループの論文執筆活動のための10日間の海外研究奨励金及び論文内の写真掲載のための著作権料を助成していただきました。日本学術振興会の海外研究者招聘プログラム、ピーター・グリリ(ボストン日本協会名誉会長)、浦川宜也(ヴァイオリニスト、東京藝術大学名誉教授)、田中美鈴(公益財団法人青山音楽財団理事長)、肥山紗智子、柏木ドリス、小田智美(以上、神戸大学学生)、チャールズ・ヒロシ・ギャレット(ミシガン大学教授)、椿紅子(東京在住、音楽学者)、猪俣正幸(NHK交響楽団事業広報部広報グループ)、内藤一成(宮内庁書陵部編修課主任研究官)、藁谷はるか(名古屋市公会堂館長)、多田真紀子(神戸大学 人間科学図書館)、デーヴィッド・マックナイトとジョン・ポラック(ペンシルベニア大学図書館)、エリ・ミズカネ(ペンシルベニア大学図書館管理・複写

サービスコーディネーター）、永原宣（マサチューセッツ工科大学歴史学科准教授）、そして山田久仁子（ハーバード燕京図書館日本コレクション司書）、エリザベス・ベルント・モリス（ハーバード大学エッダ・カーン・ロエブ音楽図書館）にも感謝いたします。執筆者一同、American Musicの編集者であるゲイル・シャーウッド・マギー、日本語版にコメントを寄せてくれた大西義明にも謝意を表しますとともに、本論文の匿名の読者の皆様方にも厚く感謝を申し上げます。

日本語版の脚注では、日本語で出版されたものに関しては日本語表記、英語版は英語表記を採用している。日本人の名前は英語表記の際は、名前の後に苗字の順。今回、日本語の演奏会評など、原文が日本語のものも多いため、American Music のご厚意で、英語版と同時に日本語版も発表することになった。日本語訳は、原文が日本語の場合以外は、大田美佐子、木本麻希子が担当した。

基本参考文献に関しては、以下の略語を使用している。

Anderson Collection of Photographs: Marian Anderson Papers, Rare Books and Manuscripts, Kislak Center for Special Collections, University of Pennsylvania Libraries

Anderson Diary: [Marian Anderson], "The Year 1953," personal diary, folder 7972, box 148, Anderson Papers

Anderson-Hurok Scrapbooks: Hurok Attractions, Inc., compiler, "Marian Anderson [scrapbooks]," vol. 1 (of 2), Performing Arts Research Collections, New York Public Library

Anderson Papers: Marian Anderson Papers, Rare Books and Manuscripts, Kislak Center for Special Collections, University of Pennsylvania Libraries

Dower: John W. Dower, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II* (New York: W.W. Norton, 1999) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて - 第二次大戦後の日本人』上・下巻（増補版），三浦陽一。高杉忠明・田代泰子訳，東京：岩波書店，2004年。

Keiler: Allan Keiler, *Marian Anderson: A Singer's Journey* (New York: Scribner, 2000)

¹ "Miss Anderson Sings to Royalty," *New York Times*, May 24, 1953.

² 1957年秋のアンダーソンの演奏ツアーでは、現在の韓国、台湾、香港、フィリピン、カンボジア、ミャンマー、ベトナム、タイ、シンガポール、マレーシア、スリランカ、インド、そしてパキスタンを訪れた。（Keiler, 281-88; と Danielle Fosler-Lussier, *Music in America's Cold War Diplomacy* (Berkeley: University of California Press, 2015), 109-12.を参照）アンダーソンは、レポーターに、韓国へ向かう途中に東京で2日間を過ごしたことを語り、「私は、4年前にここで開催した演奏ツアーで知り合った多くの友人に会いたいのです。」と話した。（Peter Ross, "Soldiers Like Classical Music: Marian Anderson," *Pacific Stars and Stripes*, September 23, 1957, 5）この出版物には複数のエディションがあり、明白に分類されていない。そのため、ここでは、アンダーソンに関する記述を含むものに焦点を当てている。1950年代、この米軍の日刊紙は、アメリカのニュースと広範囲にわたるスポーツ報道、クロスワードやパズル、そして簡易な日本語のレッスンを含むその他のトピックを報道した。

³ 戦時の特需については、Dower 528を参照。海外音楽家の来日の日付は *Nippon Times* に記録されている。1953年3月19日から20日のギーゼキングとNHK交響楽団の演奏会の広告を参照（1953年2月22日の紙面に掲載）、ハイフェッツとカラヤンについては、Marcel Grilli, "Speaking of Music," April 15, 1954.参照。1950年代初頭の来日のヴィルトゥオーザについて記録している日本史の記述は以下の文献を参照。（1）皆川弘至 「クラシック音楽文化受容の変遷：外来

演奏家によるコンサート史への一考察」(音楽表現学科特集号),『尚美学園大学芸術情報学部紀要』,2004年,71-164頁;(2)山崎浩太郎『演奏史潭 1954/55 - クラシック音楽の黄金の日日』,東京:アルファベータブックス,2017年,71-75頁;(3)伊奈一男「来朝演奏家 噂話」,『音楽の友』,1953年4月号,118頁;(4)日本戦後音楽史研究会『日本戦後音楽史 上 戦後から前衛の時代~1945-1973』,東京:平凡社,2007年,42-61頁。

⁴ Dower, 23. 日本語増補版では、上巻 6 頁。占領期の音楽研究では、以下の文献も重要である—日本戦後音楽史研究会編『日本戦後音楽史 上』と山崎浩太郎『演奏史潭』。歴史に対する日本人の姿勢に関しては、Philip A. Seaton, *Japan's Contested War Memories: The "Memory Rifts" in Historical Consciousness of World War II* (London: Routledge, 2007)を参照。

⁵ “Japan Sees Marion [sic] Anderson: With Spirituals and Classics, America’s Great Singer Scores Major Triumph in Orient,” *Our World*, November 1953, 27. 当件の複写は、マリアン・アンダーソン・コレクション (folder 9847, box 238, Anderson Papers) で確認できる。

⁶ “Recorded Concert Set,” *Nippon Times*, July 25, 1948, 3. これらの演奏会が開かれたことは、戦後直後の日本では想像し難いと感じられるが、ライブ演奏ではなく、レコードコンサートが開かれた。レコードコンサートのレパートリーに関しては、サミュエル・バーバーの《管弦楽のためのエッセイ第 2 番》、ディームズ・ティラーの《鏡の国のアリス組曲》、マリアン・アンダーソンによって歌われた黒人靈歌も、CIE 図書館の「150 の日本人の常連客」では視聴可能であった。

⁷ 「美しさを根っこに横へのつながりを末盛千枝子×舟越桂×中村桂子」生命誌ジャーナル 2008 年冬号 (http://www.brh.co.jp/seimeishi/journal/059/talk_index.html#talk_02). チケット価格については、写真 29 を参照。

⁸ 2018 年 2 月 8 日に米国マサチューセッツ州ケンブリッジでのピーター・グリリ、大田美佐子、キャロル・オージャの対談に基づく。2018 年 7 月 18 日にオージャからの E メールを通した対話で、内容を補足した。

⁹ 浦川宣也は、フランツ・ルップと共に演じた唯一の日本人ヴァイオリニストであった。1976 年にドイツのレーリングンで、浦川のヴァイオリンのソロコンサートに参加したルップのいとこを通して、浦川はルップと知り合った。浦川とルップは、1978 年から 1980 年代まで共に演奏活動をし、ベートーヴェンとブラームスのヴァイオリン・ソナタ全集（フォンテックから発売）を録音した。浦川は、1940 年に生まれ、ヴァイオリンを鈴木慎一と小野アンナ女史に師事。1949 年、9 歳で学生音楽コンクール第 1 位。1953 年、13 歳で第 22 回音楽コンクール入賞。東京藝術大学入学の年に西ドイツ政府 DAAD 獎学生として 2 年間渡独。1964 年にミュンヘン国立音楽大学を首席最優秀賞で卒業。指揮者 J. カイルベルト氏に認められ、1965 年の春に名門バンベルク交響楽団第 1 コンサートマスターに就任。1981 年に日本に居を移し、東京藝術大学助教授となつた。現在、東京藝術大学名誉教授。

¹⁰ 2018 年 3 月 6 日に大阪で実施された浦川宣也氏と木本麻希子とのインタビューに基づく。インタビューの内容は、次のトピックで構成されている。(1) 1953 年の東京でのマリアン・アンダーソンの演奏会、(2) 1970 年代から 1980 年代までのフランツ・ルップとの共演、(3) 1978 年と 1980 年のフランツ・ルップとのレコーディング。「黒人靈歌」は、日本では一般的な訳語であり、

現在も継続的に使用されている。現在のアメリカ合衆国では、「黒人」という言葉は一般的には使用が避けられている。もうひとりの日比谷公会堂での聴衆は高村光太郎（1883-1956）で、教科書にも出てくる詩人で彫刻家であった。高村は、日記にアンダーソンの演奏会の日付と場所を記していたが、彼女の演奏の印象については何も記録されていなかった。高村光太郎『高村光太郎全集第十三巻』（東京：筑摩書房），1953年，199-200頁。

¹¹ 2018年7月10日に京都での田中美鈴氏と木本麻希子の対談に基づく。田中美鈴氏の言葉は、赤木仁兵衛による同時期の批評と完全に一致する。赤木仁兵衛「黒ビロードの声〈アンダスン女史を聴いて〉」中国新聞，1953年5月13日。

¹² 「1953年マリアン・アンダーソン声楽リサイタル」は、英語での演目詳細とともに、主として日本語で書かれたプログラム冊子である(folder 8672, box 186, Anderson Papers)。この冊子の冒頭には、1939年のリンカーン記念堂でのアンダーソンの演奏会の写真が掲載され、アンダーソンとルッピの略歴を含み、プログラムAとBの曲目が記載されている。日本RCAビクターのアンダーソンのレコードの広告も掲載されている。

¹³ Marc Gallicchio, *The African American Encounter with Japan and China: Black Internationalism in Asia, 1895-1945* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000), 3.

¹⁴ W. E. B. Du Bois, "Inter-racial Implications of the Ethiopian Crisis: A Negro View," *Foreign Affairs* 14 (October 1935): 88-89, quoted in Gallicchio, *African American Encounter*, 71.

¹⁵ A Negro Soldier, "[Letter to the Editor:] How Would Japs Treat Negroes?" *Pittsburgh Courier*, January 24, 1942. 本論は、以下の論文で議論が展開されているが、特に引用されていない。Gallicchio, *African American Encounter*, 119.

¹⁶ Yukiko Koshiro, "Beyond an Alliance of Color: The African American Impact on Modern Japan," *positions: east asia cultures critique* 11, no. 1 (Spring 2003): 186.

¹⁷ Sarah Kovner, *Occupying Power: Sex Workers and Servicemen in Postwar Japan* (Palo Alto, CA: Stanford University Press, 2012), 27.

¹⁸ Hiromu Nagahara, *Tokyo Boogie-Woogie: Japan's Pop Era and Its Discontents* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2017), 175.

¹⁹ 以下の文献を参照。Mayers and Hattori, "Songs, East and West," *Seventeen*, May 1953, 54; "The Orphan Record," *Redbook*, May 1953, 77. *Seventeen*は、男性は両方とも米兵であったと指摘している。"Columbia Pays 5G for 'Nasai' Pic Yen," February 25, 1953. 一方、*Redbook*は、ハットリの名前は出さずに、作曲者が「日本コロンビアレコードの日本人従業員」であったと主張し、彼が米兵であったかどうかについては触れていない。永原は、その作曲者の名前がハットリ・イツローであったと述べている("The Orphan Record," 77)。この著述に関して、日本コロンビアからのバウアーの〈ごめんなさい〉の録音は以下のサイトで視聴可能である。<https://www.youtube.com/watch?v=fH0zCQ4XmQ4>. 〈ごめんなさい〉のアメリカのレコードに関しては、"Reviews of This Week's New Records: New Records to Watch/Popular/Gomen-Nasai," *Billboard*, February 28, 1953, 76. を参照。

²⁰ 永井萌二(朝日新聞記者)「ごめんなさい 混血児の諸問題」,『6.3 教室』6巻10号,新教育協会,1952年12月,55-59頁.

²¹ Kristin Roebuck, "Orphans by Design: 'Mixed-Blood' Children, Child Welfare, and Racial Nationalism in Postwar Japan," *Japanese Studies* 36, no. 2 (2016): 193.

²² ローバックは、混血児に関する矛盾した統計結果に当惑している。「最も信憑性の高い調査データは、1950年代初頭に、混血児の10人に1人が孤児院もしくは国家の支援による施設で生活をしていたことを指摘している。」ローバックは、混血児たちをアメリカ合衆国へ「移住」、つまり、日本から混血児たちの追放を意味する内容を提案していた。しかし、日本人が移民することは大々的に禁止されたため、アメリカ合衆国の移民法は同様に解決が難しい要因を生み出したのである。(ibid., 193-94).

²³ 「世界的アルト歌手——近く来日のアンダーソン」朝日新聞,1953年4月26日.

²⁴ Yukiko Koshiro, *Trans-Pacific Racisms and the U.S. Occupation of Japan* (New York: Columbia University Press, 1999), 195.

²⁵ 概して、ジョセフィン・ベーカーは、米国における人種差別を一貫して公然と非難しており、国際的な演奏活動においても、アンダーソンより政治的な発言力があった。たとえば、ラテンアメリカでの1952年の演奏ツアーのとき、ベーカーは、第二次世界大戦中、「悲劇の状況」として日系アメリカ人の強制収容を非難して、ブエノスアイレスにおける日本人のコミュニティのメンバーに向かって語った。(Mary L. Dudziak, "Josephine Baker, Racial Protest, and the Cold War," *Journal of American History* 81, no. 2 [September 1994]: 556-57) ベーカーは、異なる国々からの12人の子どもを養子にした。彼女の日本人の養子たちは、山本アキオと木村テルヤであった。(Konomi Ara, "Josephine Baker: A Chanteuse and a Fighter," *Journal of Transnational American Studies* 2, no. 1 [2010]: n.p.)

²⁶ 「昨夜、市公会堂で独唱会——アンダーソン女史」朝日新聞(名古屋),1953年5月16日.

²⁷ ジョン・G・ラッセル 『日本人の黒人観 -問題はちびくろサンボだけではない』,東京:新評論,1991年,53頁.

²⁸ 古垣は当初、GHQに勤務していた。本論文の当該セクションは、ケーラー(265-65)と日本の新聞におけるアンダーソンの演奏ツアーについての多くの報道を参照。

²⁹ Anderson's Diary, April 27. 終始一貫して、アンダーソン特有のスペルと省略形が日記のなかで確認される。

³⁰ 「羽田空港の歴史」
https://www.tokyo-airport-bldg.co.jp/en/enjoy/history_of_haneda_airport/.

³¹ この宴への招待状(英語)は、アンダーソン・コレクションの論文集に含まれている(Box 65, Folder 4172)

³² 「アンダーソン嬢来名——素晴らしい日本の琴」中部日本新聞, 1953年5月15日.

³³ 「黒人靈歌と琴の印象」神戸新聞, 1953年5月7日.

³⁴ 「音楽涼風談: 宮城道雄と語る(聞き手 野村光一)」『音楽の友』, 1953年7月, 56頁.

³⁵ Dower, 208.

³⁶ “The Imperial’s First Century,”は、*The Imperial: The First 100 Years* (Tokyo: Imperial Hotel, 1990)に序文として書かれている。ホテルは、アンダーソン来日1年前の1952年4月に日本人によるマネージメント体制に戻った。フランク・ロイド・ライトによってデザインされた最新の建物の構造は、終戦時にアメリカ軍の空襲で破壊された。占領軍によって、その一部が修繕され、そのホテルは、極東国際軍事裁判のために高位の役員や議員や報道記者たちに貸し出された。ボブ・ホープやマリリン・モンローを含む韓国を訪問したエンターテイナーたちもまた占領期にそのホテルに滞在した。ibid., 89-198.を参照。

³⁷ 1945年3月9日から10日に起きた東京での焼夷弾攻撃では、10万人以上の死者が出て、約80万人が家屋を失った。(Edwin P. Hoyt, *Inferno: The Firebombing of Japan March 9-August 15, 1945* [Lanham, MD: Madison Books, 2000], 55, 72).

空襲の4日後に、日比谷公会堂での演奏会が予定通り開催された。山田一雄指揮、日本交響楽団の演奏で、演目は、チャイコフスキーの交響曲第4番、ストラヴィン斯基の《火の鳥》組曲、そして尾崎宗吉の「田園曲」であった。(「演奏会カレンダー」*Nippon Times*, 1945年3月7日、「日比谷公会堂」<https://ja.wikipedia.org/wiki/日比谷公会堂>)

³⁸ Marian Anderson, *My Lord, What a Morning: An Autobiography* (New York: Viking Press, 1956), 256. アンダーソンの旅程表は、厳密には、彼女が回想するように、(演奏会、観光、休息)の三日単位で行われていたわけではなく、様々な活動と舞台出演でぎっしりと詰まっていた。

³⁹ 「アンダーソン第一声 NHK①後 8・0」中国新聞, 1953年4月29日.

⁴⁰ アンダーソンの来日の前年に、日本全国で1,000万以上のラジオの契約があり、1958年には最高契約数が1,480万に達した。占領期間中と占領期間後、ラジオと民主主義の普及は、密接に関連していた。1950年の放送法が「政府の放送活動：国民への最大の貢献、スピーチの自由、そして健全な民主主義の展開への貢献、の3つの要素を明白に定義づけた」とときに、GHQはそのメッセージを広めるために「マスメディアを存分に使った」のである。(Hisateru Furuta, *Broadcasting in Japan: The Twentieth Century Journey from Radio to Multimedia* [Tokyo: NHK, 2002], 110, 7, 79, 97).

⁴¹ Tetsuro Furukaki, “Preface: Radio Links Us with the World,” *Today’s NHK* (東京：日本放送協会, 1951年), 3. Box 65, Folder 4172, Anderson Papers.

⁴² 「アンダーソンやダミアの独唱」毎日新聞, 1953年5月1日.

⁴³ Anderson’s Diary, May 1.

⁴⁴ 「アンダスン独唱会——NHK②後 8・05 音楽のおくりもの」中国新聞, 1953 年 5 月 14 日。

⁴⁵ Robert Murphy, letter to Marian Anderson, May 4, 1953, US Embassy, Tokyo, Japan. Box 89, Folder 5812, Anderson Papers.

⁴⁶ Anderson's Diary, May 2.

⁴⁷ Anderson's Diary, May 19. ニューヨーク市に歌舞伎公演を普及させる活動は、1 年前の 1952 年に始まった。バーバラ・ソーンブリーが説明しているが、著名なアメリカ人の作家で舞台俳優のポール・グリーン、ジョシュア・ローガン、そしてジェームス・ミッ彻ナーは、戦時中にアメリカの敵国であった日本について何も情報がない状態で日本文化の秀でた例として歌舞伎の普及を推進した。占領期が終わりに近づくにつれ、米国では、日本文化への感謝と賞賛を示すことで、冷戦の同盟国として日本と良好な関係性を築くことがますます望まれるようになり、その状況下でアメリカは歌舞伎の普及に尽力した。1954 年に吾妻歌舞伎(アヅマカヅキ)の踊り手と音楽家をニューヨークに招待したのがアンダーソンのマネージャーのソル・ヒューロックだった。Barbara Thornbury, *America's Japan and Japan's Performing Arts: Cultural Mobility and Exchange in New York, 1952-2011* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2013), 65. を参照。

⁴⁸ 「『日本の歌も習いたい』来日の歌手アンダーソン——ピアニストのルップ氏もリサイタル」東京新聞, 1953 年 5 月 1 日。彼女の日記によると、アンダーソンは 5 月 3 日に博物館で装飾的な衝立を鑑賞し、5 月 14 日には彼女自身が「もっとも印象的だった」と綴った京都でのお茶会を体験した。

⁴⁹ Anderson's Diary, May 14.

⁵⁰ アンダーソンの演目については、補遺 A を参照。

<http://www.press.uillinois.edu/journals/am/media/andersoninjapan/>

⁵¹ アンダーソンは、次のように続けた。「若い女性[水原文枝]が通訳をし、その他に私たちのお世話をしてくれたのが、4 人の男性であった。ひとりの若い男性は、銀行の出納係を担当するためには派遣されてきた。彼がホテル、レストラン、ショップでの代金を支払った。」(Anderson, *My Lord*, 257). 1950 年代のジェンダーの規範がいま見えるのは、水原とアメリカ合衆国文化大使館員のマーガレット・ウィリアムズ以外は、アンダーソンの演奏ツアーでの専門職は男性優位(たとえば、批評家、政治家、NHK の代表者など)であった。しかし、「プライベート」な場(グループ・インタビュー、皇族との交流)では、女性優位であった。アンダーソンが交流した日本人歌手たちも、ほとんどが女性であった。

⁵² サンケイホール(産業経済新聞社が運営)は、アンダーソンの来日のちょうど 1 年前の 1952 年に 1,500 人の収容数で大阪に開館した。ホールは、2005 年に閉鎖した。(<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/サンケイホール> 参照) 宝塚大劇場は、1924 年に 3,500 席の収容人数で開館した。1945-46 年には米軍に占有されていたが、戦後、宝塚に返還され、1992 年に新しい建物へと変わった。(<https://ja.wikipedia.org/wiki/宝塚大劇場>)。1954 年 4 月に東京で、混血児のためにジョセフィン・ベーカーがはじめて開いた慈善コンサートでは、「宝塚レビューのスターたち」と共演したと報告されている。(“Limited Admission to 1st Performance of Josephine

Baker,” *Nippon Times*, April 13, 1954) 宝塚による他の現代の出版物については、同号の Elizabeth York の論文を参照。

⁵³ Anderson’s Diary, May 9. アンダーソンは、その建物の年数について「1,300」と書いていたが、それは「300」の意味である。アンダーソンは、どこの場所を訪れたのかをはっきりと書いていなかったが、*Our World* の記事では、桂離宮であると言及されている。“Japan Sees Marion [sic] Anderson,” 30.

⁵⁴ 翌晩、広島のホテルで、アンダーソンは次のように記録している。「もうひとつの居間で、男たちは、昔のアメリカの歌が流れてくる蓄音機の音楽に合わせて踊る芸者と宴会していた。」(Anderson’s Diary, May 10).

⁵⁵ 「八丁座」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/八丁座>

⁵⁶ 「『クラシックな音楽が好き』池田ご夫妻ア女史の独唱会へ」読売新聞（広島）, 1953年5月13日、「『厚子にせがまれて……』アンダーソン女史独唱会—隆政氏夫妻仲よく来廣、得意の黒人歌など—満場うならせた独唱会」毎日新聞（広島）, 1953年5月12日.

⁵⁷ Anderson’s Diary, May 10.

⁵⁸ 小林公「公会堂の利用で米軍と交渉した想い出」『名古屋市公会堂-半世紀の歩み』所収、名古屋市市民局発行, 1980年, 36-37頁。名古屋市公会堂は、昭和天皇の結婚を祝して建設され、1930年10月に開場した。第二次世界大戦中、大日本帝国陸軍第2師団によって利用され、1945年から1956年まではGHQによって運営された。

⁵⁹ 「昨夜、市公会堂で独唱会—アンダーソン女史」朝日新聞（名古屋）, 1953年5月16日.

⁶⁰ 「アンダーソンの特別慈善公演」毎日新聞, 1953年5月10日。「切符がなかなか手に入らなくて高いプレミアムまでついているマリアン・アンダーソンの特別慈善演奏会が、19日夜日比谷公会堂で開かれます。その純益は、孤児救済のために当てられることになっています。曲目はヘンデル、シュトラウスまでの歌曲、お得意の黒人靈歌など（1,500、1,000、800、500円）」

⁶¹ いくつかの新聞記事では、次のような表現を使用している（例：“Marian Anderson Gets Mikado Medal,” *New York World Telegram and Sun*, May 22, 1953）。アンダーソン・ヒューロックのスクラップブックで同じページがある。このメダルは、有功章（Yukoshō）ではなく、誤ってYushokoと書かれることがある。

⁶² 成人すると皇男子の義宮は、常陸宮正仁親王として知られるようになり、皇女の清宮は、島津貴子（結婚して皇室を離脱）として知られている。

⁶³ 「皇居で独唱会—アンダーソン女史」朝日新聞, 1953年5月23日、「皇后陛下、アンダーソンの歌をお聞き」読売新聞 1953年5月23日夕刊。アメリカ合衆国では以下の二つの記事：“Miss Anderson Sings to Royalty,” *New York Times*, May 24, 1953; and “Marian Anderson First Negro Guest of Japan Empress,” *Jet*, June 4, 1953, 59.

⁶⁴ 5月22日に開催されたこの演奏会は、NHKラジオ第1放送で5月28日に放送された。「アルト・ラプソディ—亡き子をしのぶ歌、独唱アンダーソン、日比谷公会堂【NHK 第一=9・15】独唱マリアン・アンダーソン、合唱東京放送合唱団、芸術大学音楽部合唱団、管弦楽クルト・ウェス指揮、NHK交響楽団」午後9時15分。大阪日日新聞、1953年5月28日。

⁶⁵ Anderson's Diary, May 22.

⁶⁶ Roosevelt, "My Day, May 25, 1953," *The Eleanor Roosevelt Papers Digital Edition* (2017), accessed August 8, 2018,

[http://www2.gwu.edu/~erpapers/myday/displaydoc.cfm? y=1953& f=md002545](http://www2.gwu.edu/~erpapers/myday/displaydoc.cfm?y=1953&f=md002545).

ルーズベルトは、3日前に行われたミーティングについてコメントをした。ヒューロック・アトラクションズからのプレスリリースによると、「その演奏会は、開催4ヶ月前に売り切っていたので、蝶ネクタイを付けた外務大臣が、自分のチケットを元ファーストレディに差し出した。」("Special to Leonard Lyons," undated, folder 9119, box 207, Anderson Papers).

⁶⁷ *Nippon Times*, May 23, 1953.

⁶⁸ Anderson's Diary, May 25.

⁶⁹ 二つの大阪の新聞によると、5月4日の午後9時5分のラジオでは、ルップとNHK交響楽団とが共演して、シューマンのピアノ協奏曲 イ短調、モーツアルトの幻想曲 ハ短調（独奏曲）が放送されている。演奏会については、なおも事実関係が不明であり、ルップとNHK交響楽団による公開の演奏会が開催された証拠資料は見つかっていない。さらに、彼は5月4日の午後7時にはアンダーソンの声楽リサイタルの伴奏をしていた。もし、両方の演奏が同日に開始されていたなら、シューマンとモーツアルトの演奏は、ラジオ放送のみであったということになる。*Nippon Times* (1953年5月4日) は曲目名を誤り、シューマンのピアノ協奏曲 変ホ長調（シューマンの唯一のピアノ協奏曲は、イ短調である）と記載した。ここでは、ルップの演奏会について言及する日本の地方紙を例示する。

「NHK①後9・05 フランツ・ルップ—特別演奏会」大阪新聞 1953年5月5日。「(ラジオききもの) 奏でる得意の「幻想曲ハ短調」フランツ・ルップ演奏会、四日夜【NHK 第一=9・5】ピアノ=フランツ・ルップ、管弦楽=クルト・ウェス指揮のNHK交響楽団」大阪日日新聞、1953年5月5日。

⁷⁰ 増沢健美「聴衆に細かい配慮—フランツ・ルップ 独奏会評」朝日新聞（東京）夕刊、1953年5月26日。5月24日の帝国劇場でのルップのピアノ独奏会の演目は、次の作品が取り上げられている：バッハの半音階的幻想曲とフーガ、スカルラッティのソナタ変ホ長調、ニ長調、ト長調、そしてハ長調、ベートーヴェンのソナタイ長調op.101、ドビュッシーの「水に映る影」と「ラモー贊歌」（《映像》第1集より）、ブラームスのカプリッチョ第1番op.76とラプソディー第2番op.79、ショパンのマズルカ 第4番イ長調 op.67、華麗なるワルツ 第1番 変イ長調 op.34と幻想曲 ヘ短調 op.49 ("Programs, 1953," folder 8672, box 186, Anderson Papers).

⁷¹ Anderson's Diary, May 24.

⁷² 「『日本の歌も習いたい』来日の歌手アンダーソン—ピアニストのルップ氏もリサイタル」東京新聞、1953年5月1日。大阪新聞は、日本でのルップのレコードの人気についても言及した：

「NHK①後 9・15 フランツ・ルップ—特別演奏会」大阪新聞, 1953年5月5日.

⁷³ 鳥海一郎 「美しく危険な先例—アンダソンのシーベルト」朝日新聞（大阪版）, 1953年5月9日.

⁷⁴ 浦川宣也へのインタビューに基づく（インタビュアー：木本麻希子）。

⁷⁵ “Japan Sees Marion [sic] Anderson,” 29.

ある論文によると、この演奏ツアーは、「米軍と国務省の合同での支援」を受けていた。アンダーソン・コレクションからの資料では、日本と韓国の両方における人脈で運営されていたと詳細が示されている。“Miss Anderson to Korea,” *Variety*, May 27, 1953, Anderson-Hurok Scrapbooks.

⁷⁶ Hurok Attractions press release, May 27, [1953], folder 9119, box 207, Anderson Papers.

⁷⁷ Anderson's Diary, May 28.

⁷⁸ Anderson, as quoted in Andrew Headland Jr., “Marian Anderson: A High Note to Korea,” *Pacific Stars and Stripes*, June 20, 1953, [6]

⁷⁹ アンダーソンは、そのグループから贈り物として韓国の衣服を受け取った(Anderson's Diary, May 29)。その10月に、プサンでアメリカ文化大使館員のMarcus W. Scherbacherは、アンダーソンへ次のように手紙を書いた：「あなたの訪問が韓国人音楽家たちにとってどれほど意義深いものであったかを、あなたにお伝えするために、私が何度もお便りを出していることには意味があると思っています。ここの音楽家たちは、互いに集まると、あなたの演奏会とあなたと出会った素晴らしい機会の話で持ちきりなのです。」(Marcus W. Scherbacher to Marian Anderson, October 28, 1953, folder 5813, box 89, Anderson Papers).

⁸⁰ Margaret H. Williams to Marian Anderson, May 15, 1953, folder 5812, box 89, Anderson Papers.

⁸¹ Anderson's Diary, May 29.

アンダーソンの演奏会での群衆の人数については、アンダーソン・ヒューロックのスクラップブックにおける未詳の韓国の刊行物から引用している。その記事は「世界的に有名なアフリカ系アメリカ人歌手—アンダーソン女史が韓国を訪問」と題され、アンダーソンが驚くほど会場いっぱいの観衆に囲まれた写真が掲載されている。当該記事は、柏木ドリスが韓国語から英語に翻訳した。日付のないヒューロック・アトラクションズのプレスリリース「Special to Ed Sullivan」では、低い見積もりを出していた。—「先週、マリアン・アンダーソンは、釜山、韓国の避難所の病院のひとつの中庭で、主要な演奏会を開催したが、アメリカの大使館員は建物の付近には 20,000 人、建物を囲んで外の通りには 40,000 人が集まっていたと明らかにした」(folder 9119, box 207, Anderson Papers).

⁸² Headland, “High Note to Korea.”

⁸³ ダグラス・ホールは、このインタビューの間に、アンダーソンと韓国の孤児のグループとの面会の機会を設定した。(Douglass Hall, “They All Smiled--but One,” *Afro Magazine*, June 27, 1953,

in Anderson-Hurok Scrapbooks).

⁸⁴ Ibid.

もうひとつの日付のないヒューロック・アトラクションズのプレスリリース「Special to Dorothy Kilgalen」では、アンダーソンに対する部隊の称賛の声を明らかにし、演奏会に参加した人々の決意や勇気を表現することで、家庭での連帯意識も高めることになったと報告している。「何千もの米兵が、前線からアンダーソンの演奏を聴くために 25 マイルから 50 マイルをヒッチハイクして移動した。そのうちのひとりがアンダーソン女史に次のように書いた『私は 10 ヶ月もの間ここにいましたが、今夜あなたの歌を聴いた後なら、あと 10 ヶ月は耐えられると思っています。ありがとうございます』」(folder 9119, box 207, Anderson Papers).

⁸⁵ アフリカ系アメリカ人で、1950 年代初頭に GHQ の管轄下の下総航空基地（白井基地）の学校の校長であった Beatrice Alcine は、NHK 交響楽団とのアンダーソンの共演について、記者に「アンダーソンが日本人歌手で構成された大規模な 60 人のコーラスとともに歌唱し、日本の交響楽団の前に立ったとき、アンダーソンの演奏から、彼女の人生のスリルを垣間見るようだった。」と語った。(Gladys P. Graham, "Educator Returns from Japan Post," *Black Dispatch*, July 18, 1953, Anderson-Hurok Scrapbooks). *The Black Dispatch* は、オクラホマ市で発刊されたアフリカ系アメリカ人の新聞。

⁸⁶ Dower, 75. 日本語増補版 76 頁.

⁸⁷ Mire Koikari, *Pedagogy of Democracy: Feminism and the Cold War in the US Occupation of Japan* (Philadelphia: Temple University Press, 2008), 20. コイカリは以下のように述べている。「日本女性にとって、前例にないような解放の瞬間、占領期の性改革は、一方で密接に戦前の国家主義者や帝国主義的政治と結びつき、他方では冷戦によって生み出された文化のダイナミクスと結びついていた。」

⁸⁸ Walter P. Guzzardi, letter to Marian Anderson, July 9, 1953. Box 89, Folder 5800, Anderson Papers. この資料が示すように、韓国人々に披露されたアンダーソンの演奏について、米国政府は Danielle Fosler-Lussier が「音楽の幅広いアピールと政治的には一見中立なコンビネーション」と呼んできたものを信頼していた。つまり、その関係性こそが、「音楽を政府のプロパガンダとして特別な形式に仕立てあげている。」(*America's Cold War Diplomacy*, 12)

⁸⁹ 「(デモクラシー教室) ニグロの歌姫・民主主義の本質的な例」 読売新聞, 1946 年 1 月 29 日。

⁹⁰ Mary L. Dudziak, *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2002), 14. 以下の資料も参照のこと。 Chapter 2, “Telling Stories about Race and Democracy” (pp. 47-78) ここでは、アンダーソンのツアーと同時代の合衆国の海外における人種問題が議論されている。

⁹¹ Danielle Fosler-Lussier, *America's Cold War Diplomacy*, 120. ケーラーが書き留めているように、1950 年代にマリアン・アンダーソンは「政府に近い著名人の社交グループのなかでももっとも歓迎され、信頼できる黒人の著名人の一人であり、卓越した業績をもつ黒人女性で、アメリカに対して忠誠心があり、愛国的であり、黒人の扱いを公に告発することにも積極的ではなかった。」(281)アンダーソンの訪日は 1956 年のディジー・ガレスビーの中東ツアーに始まる政府支援による

アフリカ系アメリカ人のコンサートツアーの前に行われた。以下の資料を参照。Penny M. Von Eschen, *Satchmo Blows Up the World: Jazz Ambassadors Play the Cold War* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2004).

⁹² 「編集手帖」 読売新聞, 1953年5月23日. この記事は宮内庁書陵部の新聞記事の切り抜きファイルに収められていた。マッカーサーに関する記事はファイルに収められることはなく、アメリカの要人として、エレノア・ルーズベルトへの関心は特別だったといえる。エレノア・ルーズベルトの日本滞在に関しては以下の研究を参照。“Promoting Democracy in Japan (1953),” Eleanor Roosevelt Papers Project, George Washington University,
<https://erpapers.columbian.gwu.edu/promoting-democracy-japan-1953>, accessed August 8, 2018

⁹³ Eleanor Roosevelt, *The Autobiography of Eleanor Roosevelt* (New York: Harper and Brothers, 1961), 337. エレノア・ルーズベルトの1961年の自叙伝は坂西志保によって訳され、1953年の天皇との会話についても書かれているが、全体として要約されているため、この記述は確認できない。エリノア・ルーズベルト『エリノア・ルーズベルト自叙伝』坂西志保訳、東京: 時事通信社, 1964年。

⁹⁴ Anderson's Diary, May 16.

⁹⁵ Koikari, *Pedagogy for Democracy*, 4. コイカリは以下のように述べている。「日本女性の意識を変えるために、占領軍の一員として来日したアメリカ女性によって改革が広められたが、その際はスキットやロールプレイといった手法が用いられた。その民主主義への道では、彼ら自身のアメリカ的、白人中流階級の女性の規範、つまり家庭的で異性愛であることが反映された。」(77-78)ラジオ番組にも当時の婦人問題の影響がある。アンダーソンの資料にある1951年のNHKの広報誌では、民主主義的理想的プロパガンダのために、多様な番組が用意されていた。『婦人の時間』『陽気な喫茶店』『働く婦人の時間』というようなタイトルで、封建的な家を守ってきた女性たちに、民主主義の思想を教える手段として、番組編成も配慮されている。(Today's NHK. Tokyo: Nippon Hoso Kyokai, 1951, 21, Box 65, Folder 4172, Anderson Papers). 『婦人の時間』に関しては、以下も参照 Koikari, *Pedagogy of Democracy*, 116-118.

⁹⁶ Elise Grilli, “Marian Anderson: Singer and Woman,” *Nippon Times*, April 22. 1953. 5月9日の鳥海一郎の批評の冒頭で、「彼女は何が一番好きかと問われると、縫い物の針を持つこととお料理」と答えている。(鳥海「美しく危険な先例－アンダーソンのシューベルト」)アンダーソンの家庭的な一面は、アメリカの雑誌でも注目してきた。特に旅に出かける時にはコネチカットの自宅用のカーテンやクッションのカバーを作るために、携帯できるミシンを持っていくことなどである。以下の資料を参照。“Famous Diva Uses Sewing Machine While on Tour,” *Hartford Courant*, May 7, 1950. For more on domestic containment, see Elaine Tyler May, *Homeward Bound: American Families in the Cold War Era* (New York: Basic Books, 1988).

⁹⁷ キリスト教化は、日本社会のあらゆる場面で起きたが、日本の映画界も例外ではない。予想される宣教師の数については、以下の文献に依拠する。紙屋牧子「占領期「パンパン映画」のポリティクス－一九四八年の機会仕掛けの神・ゼウス・エクス・マキナ」日本映画史叢書11巻『占領下の映画　解放と検閲』所収、東京:森話社, 2009年, 168-69頁。第二次世界大戦後の日本の教育界は、キリスト教に強い影響を受けた。天皇裕仁の息子、皇太子明仁は、クエーカー教徒のエリザベス・グ

レイ・ヴァイニングを家庭教師に迎え、美智子妃は東京のカトリックのミッションスクール、雙葉学園雙葉小学校、聖心女子学院中等科と高等科を卒業した。ヴァイニングは皇太子との思い出を綴っている。Elizabeth Gray Vining, *Windows for the Crown Prince* (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1952). 以下の文献も参照。袖井林次郎『マッカーサーの2000日』, 東京:中公新書, 2004年, 256頁。

⁹⁸ 坂西志保「祈りの人—マリアン・アンダーソン」『地の塩』京都:高桐書院, 1947年, 212-29頁.

⁹⁹ Matsumoto Hisao, "Shiho Sakanishi and the Japanese Collection in the Library of Congress," *Journal of East Asian Libraries* 77 (1985), 10.

¹⁰⁰ 坂西志保「神にいのる人《マリアン・アンダーソン》」『無名の偉人、アメリカ編』学校図書館文庫; 52, 東京: 牧書店, 1955年, 107-131頁. 戦後の日本におけるキリスト教については以下の文献を参照のこと。Ray A. Moore, *Soldier of God: MacArthur's Attempt to Christianize Japan* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2011).

¹⁰¹ Kenneth J. Ruoff, *The People's Emperor: Democracy and the Japanese Monarchy, 1945-1995* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2001), 3. (ケネス・ルオフ, 『国民の天皇-戦後日本の民主主義と天皇制』, 高橋紘(監修), 木村剛久・福島陸男訳, 岩波書店, 2009年.)

¹⁰² Dower, 277. 日本語版では下巻4頁。天皇裕仁は1946年6月に戦争責任を正式に免除されたが、元旦に全国の新聞で「人間宣言」という彼の意志を発表した。ダワーは天皇がいかにGHQを満足させつつ、天皇の歴史的な力を守ったのかについて注視している。「日本語で伝えられたものは、西洋人が甘い考へで期待したような、全面的な『神格の否定』とはとてもいえない内容のものであった。難解で謎めいた言葉使いをすることで、天皇裕仁は巧みにも天から途中まで降りてきただけであった。」(原文307-308, 日本語版下巻49頁)。

¹⁰³ 宮内庁書陵部の新聞の切り抜きのファイルに、アンダーソンの有功章の授与に関する以下の記事が所蔵されている。(1) "Red Cross Honors Singer," *Nippon Times*, May 20, 1953 (英文記事); (2) 「日赤から有功章—アンダーソン女史の慈善興行」日本経済新聞, 1953年5月20日; そして(3) 「アンダーソン女史の慈善独唱会」中部日本新聞, 1953年5月20日.

¹⁰⁴ Japan Sees Marion [sic]Anderson," *Our World*, November 1953, 30. アンダーソンの有功章メダルは、ソウルで一週間後にも同時に授与されたが、アンダーソンの資料には、日本赤十字社の名誉会員と有功章についての記録が残されている。(日本赤十字社の島津忠承総裁からアンダーソンへの英文手紙 May 19, 1953, Box 65, Folder 4173). アンダーソンの日記には、「高松宮妃がフランスと私に有功章を贈ってくれた」と書かれているが、日本赤十字社からのメダルか、韓国からのメダルかは不明で、新聞にもアンダーソンの授与についてしか書かれていない。(Anderson's Diary, May 19).

¹⁰⁵ Sho Konishi, "AHR Forum. The Emergence of an International Humanitarian Organization in Japan: The Tokugawa Origins of the Japanese Red Cross," *American Historical Review* 119/4 (October 2014): 1134.

¹⁰⁶ ジョセフィン・ベーカーの来日時の事柄とも重なるのは、一年後にベーカーが来日した時に東京で開いた慈善コンサートにも 秩父宮と高松宮妃が訪れていたという点である(“Tokyo Premiere” [photo caption],” *Nippon Times*, April 25, 1954).

¹⁰⁷ Anderson, *My Lord*, 259. この段落の多くの情報は、アンダーソンの自伝による。

¹⁰⁸ Anderson’s Diary, May 23.

¹⁰⁹ 「皇居で独唱会——アンダーソン女史」朝日新聞, 1953年5月23日. 「皇后陛下、アンダーソンの歌をお聞き」読売新聞 ヒューロック・アトラクションズの日付のないプレスリリースによると、皇居の御前演奏会では、皇后良子が歌曲を2曲リクエストされた。それが、〈故郷の空〉 “Comin’ Through the Rye” と 〈深い河〉 “Heav’n, Heav’n” であった。(“Special to Hy Gardner,” folder 9119, box 207, Anderson Papers).

¹¹⁰ 「『厚子にせがまれて……』アンダーソン女史独唱会——隆政氏夫妻仲よく来廣、得意の黒人歌など——満場うならせた独唱会」毎日新聞（広島）, 1953年5月12日.

¹¹¹ Furuta, *Broadcasting in Japan*, 73.

¹¹² アンダーソンの資料にある観光ガイドには、広島市によって1952年に発行された「広島」というタイトルの小冊子があり、未完成ではあるが平和祈念資料館のイメージ写真も掲載されている。その小冊子は開くと、平和のメッセージが書かれており、その後に原爆ドームと観光名所、いくつかの平和記念碑の写真を含む。(Box 367, Folder 10325).

¹¹³ Ran Zwigenberg, *Hiroshima: The Origins of Global Memory Culture* (Cambridge: Cambridge University Press, 2014), 138. Zwigenbergは、「占領期の後には『激しい反米感情』と『心からの善意』が同時に存在していて、広島を訪れたアメリカ人の多くは、加害者としてあまり敵意を向かれないかったことに驚いていた」(138頁)と記している。このことは、アメリカのソフト・パワーによるところが大きいと言及した。

¹¹⁴ 「『厚子にせがまれて……』アンダーソン女史独唱会——隆政氏夫妻仲よく来廣、得意の黒人歌など——満場うならせた独唱会」毎日新聞（広島）, 1953年5月12日. フツイは、原爆後の広島にはじめて赴任したアメリカ人外交官であった。イラン系の出自でアメリカへ移民し、第二次世界大戦中は従軍した。フツイは、1952年と1956年～57年に広島アメリカ文化センターの運営を担った。“Assignment Hiroshima,” Time, April 8, 1957.を参照。

¹¹⁵ Zwigenberg, *Hiroshima*, 94.

¹¹⁶ フアリダ・フツイ 『炭のかんちゃん——アメリカ人少女のヒロシマ物語』 Reality2 LLC, Los Angeles, 2015年, 58-60頁. アメリカ版ではページ番号が記されていない。

¹¹⁷ 「100年に一度しか聴けぬ声——期待される黒人歌姫の広島公演」中国新聞, 1953年4月6日. 広島の前売券は、他の都市での公演よりも値段の設定が低かった。1000円(指定席), 700円(大人), 500円(学生席).

¹¹⁸ 「岡目八目」中国新聞, 1953年5月22日. 彼女の日記にも、声の調子が悪いことが書かれている。「声が嗄れている」(5月11日の日記より).

¹¹⁹ 広島と長崎での原爆の被害について、推定される戦災孤児の数は、広島市長崎市原爆災害誌編集委員会編『広島・長崎の原爆災害』を参照。the Committee for the Compilation of Materials on Damage Caused by the Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki, trans. Eisei Ishikawa and David L. Swain, in *Hiroshima and Nagasaki: The Physical, Medical, and Social Effects of the Atomic Bombings* (New York: Basic Books, 1981), 435. この報告書の著者は、原爆による犠牲者の正確な数を明らかにすることは不可能で、子どもの被害は明らかにはならないと語っている。ジョン・ダワーは、1948年度の厚生省の報告書から総計123,510人という恐ろしい数の「戦災孤児、家なき子の数」を引用している。「このうち、28,248人の子供が戦災で両親を失い、11,351人が引き上げの際に家族と離れ離れになり、2640人が『捨て子』と認定され、そして81,266人という驚くほど多数の子供たちが、戦後の混乱のなかで両親を失ったか、または両親と生き別れになったとされた」(原文62,日本語版上巻56頁)

¹²⁰ The Committee for the Compilation of Materials, 440, 442. 濵澤直子は、以下の文献のなかで、600人以上の子供が7箇所の孤児院に入り、12年で7万ドルの支援を受けたと記している。*(America's Geisha Ally: Reimagining the Japanese Enemy, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006, 224)*. 濱澤は、政府の政策として、広島と長崎の犠牲者に対する公的資金の投入を禁止していたため、ノーマン・カズンズによる「精神的な養子縁組」は贖罪のひとつの道であったと言及している。

¹²¹ Yoshimaro Mori, Director of Ninoshima Gakuen, letter to Marian Anderson, August 6, 1953. Box 59, Folder 3823, Anderson Papers. 似島学園の設立者、森芳麿からアンダーソンへの手紙は原文が英語で書かれている。

¹²² Sister Maria Gratia, Director Children Home Maria-en, Nagasaki, letter to Marian Anderson, October 10, 1953. Box 16, Folder 1000, Anderson Papers.

¹²³ 2017年の長崎の新聞で、孤児院の建物が2022年までに改裝されて、富裕層のホテルになることが報道されている。「マリア園は富裕層ホテルに」長崎新聞, 2017年8月1日.

¹²⁴ "Marian Anderson Hopes to Sing in Japanese Here," *Nippon Times*, April 28, 1953. ドイツでのこれらの演奏会は、アンダーソンとルップがドイツの聴衆の前で一緒に演奏したはじめての演奏会であった。アンダーソンにとって、第二次世界大戦後、はじめてのドイツ訪問であった。前回のドイツでの演奏会は、約20年前に開催されていた。Keiler, 254. 参照。

¹²⁵ Ibid.

¹²⁶ 一例として、1945年4月20日、ヒトラーの56歳の誕生日を祝うための集いと演奏会が東京で開催された。ヘルムート・フェルマーが日本交響楽団を指揮し、バッハの協奏曲を演奏した。("Local Germans Observe Fuehrer's 56th Birthday: Spahn Stresses Nation's Unwavering Faith in Adolf Hitler's Leadership," *Nippon Times*, April 21, 1945, 1).

¹²⁷ 大森盛太郎『日本の洋楽1』新門出版, 1986年, 46頁.

¹²⁸ 佐野仁美『ドビュッシーに魅せられた日本人—フランス印象派音楽と日本近代』昭和堂, 2010年, 39頁, 西原稔『「楽聖」ベートーヴェンの誕生 近代国家が求めた音楽』平凡社, 2000年, 18頁.

¹²⁹ Marcel Grilli, "The Infinite Variety of Marian Anderson," *Nippon Times*, May 5, 1953.

¹³⁰ 「Anderson の LP」『レコード芸術』, 1953年5月, 88-95頁.

¹³¹ アンダーソンの録音については、以下の3つの雑誌に記載されている。(1)『音楽の友』1950年6月号, 75頁、(2)『音楽の友』1950年9月号, 36頁、(3)『音楽の友』1950年11月号, 48-49頁。音楽の友は、1941年12月に東京で創刊され、いまなおもクラシック愛好家たちの間で人気のある雑誌となっている。

¹³² 牧定忠「マリアン・アンダーソン《その一》」『ディスク』第14巻第1号, ディスク新社, 1951年, 44-45頁。ディスクは、1951年から1966年までクラシック音楽を対象とした日本の雑誌であった。1950年代初期に、牧は、NHKに勤務しており、のちに名古屋音楽大学学長となった。名古屋音楽大学の歴史については、大学のウェブサイトに記載されている。
<http://www.meion.ac.jp/english/history.html>.

¹³³ 寺井昭雄「アンダーソン論 附・ルップとシボーン」, 『レコード芸術』Vol.1, No.9, 音楽之友社, 1952年, 52-55頁.

¹³⁴ 村田武雄「マリアン・アンダーソンの声と技術」『レコード音楽』第22巻第9巻, 名曲堂, 1952年, 15-18頁。名曲堂から刊行されているこの雑誌は、『レコード芸術』とは別のものである。

¹³⁵ 村田武雄「アンダスンを迎える」『レコード芸術』, 1953年6月, 114-115頁。

マリアン・アンダーソンと村田の出会いは、この音楽雑誌に記載されている。『なつかしのヴァージニア』は、以下のマリアン・アンダーソンに関する座談会で議論された。

四家文子, 斎田愛子, 村田武雄「アンダーソンを聴いて<座談会>」『レコード芸術』第2巻第6号, 音楽之友社, 1953年, 52-59頁.

¹³⁶ これらの地方紙は、国立国会図書館でマイクロフィルムでのみ閲覧可能。地方紙の分類説明のある補遺Bの冒頭部分を参照。

<https://www.press.uillinois.edu/journals/am/media/andersoninjapan/>を参照。

¹³⁷ 「アンダーソンと語る——”私は率直に歌う”歌わないけどジャズは好き」朝日新聞（名古屋）1953年5月10日。これらの批評は、鳥海「アンダーソンのシューベルト」を参照。鳥海「アンダーソンのシューベルト」、山根銀二「黒人靈歌の深味——アンダーソンを聴いて」東京新聞, 1953年5月2日.

¹³⁸ 鳥海一郎「美しく危険な先例——アンダーソンのシューベルト」朝日新聞（大阪版）, 1953年5月9日.

¹³⁹ History Compilation Room, Radio & TV Culture Research Institute, Nippon Hōsō Kyōkai, eds., *The History of Broadcasting in Japan* ([Tokyo]: Nippon Hōsō Kyōkai, 1967), 301. ヒッッシュは、3

ヶ月以上に渡って、主要都市で 36 回の演奏会を開催し、その多くが NHK で放送された。その演奏会のひとつであった日比谷公会堂の演奏会の告知が、*Nippon Times* に掲載された（1952 年 4 月 21 日）。*The History of Broadcasting in Japan* の編集者は、「それまでは日本への文化交流が閉ざされていたので、海外の芸術家たちの演奏会が、新たな分野への扉を開く企画になると証明された。」と記している。（ibid.）

¹⁴⁰ W. McN, “Gramophone Notes,” *Musical Times* 76 (August 1935): 712. “W. McN”は、1910 年に創刊した *Musical Times* の編集者“William McNaught”であった。（Watkins Shaw, “William Gray McNaught,” *Grove Music Online*）5 月 1 日のアンダーソンの演奏会のあと、村田によって主催された座談会で、東京在住のドイツ人の声楽教師のマルガレーテ・ネトケ＝レーヴェがアンダーソンの《魔王》の解釈の批評をした。（四家文子、齋田愛子、村田武雄「アンダーソンを聴いて＜座談会＞」『レコード芸術』第 2 卷第 6 号、音楽之友社、1953 年、52-59 頁。）

¹⁴¹ 鳥海一郎「美しく危険な先例——アンダーソンのシューベルト」朝日新聞（大阪版），1953 年 5 月 9 日。

¹⁴² 山根銀二「黒人靈歌の深味——アンダーソンを聴いて」東京新聞，1953 年 5 月 2 日。

¹⁴³ Kira Thurman, “The German Lied and the Songs of Black Volk,” in “Studying the Lied: Hermeneutic Traditions and the Challenge of Performance,” convened by Jennifer Ronyak, *Journal of the American Musicological Society* 67, no. 2 (2014): 566, 567.

¹⁴⁴ Masakata Kanazawa, “Hidekazu Yoshida,” *Grove Music Online*, “Hidekazu Yoshida,” Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/Hidekazu_Yoshida; “Classical Music Critic Hidekazu Yoshida Dies at 98,” *Mainichi Shinbun*, May 27, 2012. 吉田は、2012 年まで「名曲のたのしみ」の司会を務めた。

¹⁴⁵ 吉田秀和「歌のふるさと——アンダーソン独唱会」毎日新聞（夕刊），1946 年 5 月 4 日。この記事の英語版がヒューロックの出版物のフォルダのなかに確認できる。タイトルが少し異なって翻訳されており、「新聞」のスペルも変更されている。“The Birthplace of Songs: Anderson Recital,” *Mainichi Shinbun* May 4, 1953, folder 9119, box 207, Anderson Papers. アンダーソンの夫への手紙では、オルフェウス・フィッシャーとエリーゼ・グリリが吉田の視点について考察をしている。「日本人は、黒人靈歌を驚くほど称賛した。彼らにとっては非常に目新しいものであつたけれども、すぐに深い共感を示したのである。」(carbon of letter from Tokyo, May 25, 1953, private collection of Peter Grilli).

¹⁴⁶ Nina Sun Eidsheim, “Marian Anderson and ‘Sonic Blackness’ in American Opera,” *American Quarterly* 63, no. 3 (September 2011): 646. 「音響上の黒人性」という表記は、寺田昭雄のものも含んで、ここで引用した多くの批判的な評価と相関性がある。寺井昭雄「アンダーソン論 附・ルップとシボーン」注 133 参照。

¹⁴⁷ 「アンダーソンと語る - 私は率直に歌う——歌わないけどジャズは好き」朝日新聞(名古屋), 1953 年 5 月 10 日。

¹⁴⁸ マリアン・アンダーソン、四家文子、三枝喜美子、薗田誠一、野村光一「座談会 マリアン・ア

ンダーソンとの声楽問答」,『音楽の友』,1953年7月号,20-25頁.

この出版物は、アンダーソン・ヒューロックのスクラップブックに含まれている。もうひとつの座談会が、5月1日のアンダーソンの演奏会の直後に開催された。その座談会は、村田武雄によって主催されたもので、歌手の斎田愛子と（座談会に2回目の）四家文子が参加した。

¹⁴⁹ 四家は、1942年12月に日比谷公会堂でベートーヴェンの交響曲第9番を日本語歌唱で録音したときの中心となった演奏家であった。ベートーヴェン：交響曲第9番「合唱付き」、日本交響楽団、日本放送合唱団、山田一雄指揮、三宅春恵（ソプラノ）、四家文子（アルト）、木下保（テノール）、矢田部勤吉（バス）、1942年録音（ナクソス・ジャパン NYNN-0001、2014年、ナクソス・ミュージック・ライブラリー）

¹⁵⁰ “Dina Notargiacomo,” in *Japanese Biographical Index*, comp. Berend Wispelwey (Munich: K. G. Saur, 2004), 634.

¹⁵¹ “Helen Traubel, Noted ‘Met’ Star, Arrives Here for Concert Tour,” *Nippon Times*, April 19, 1952. 当時、アンダーソンとトラウベルは、演奏の契約をともに行っており、両方の歌手がフィラデルフィアの Giuseppe Boghetti の指導を受けた。（“Giuseppe Boghetti: He Taught Singing to Marian Anderson and Helen Traubel,” *New York Times*, July 8, 1941）。

¹⁵² ネトケ・レーヴェ「四人の来朝音楽家の印象」,『音楽の友』,1953年9月号,36-37頁. もうひとつのアンダーソンのインタビューは、アルト歌手の柳兼子(1892-1984)によって実施されNHKラジオで5月26日午後1時5分に放送された。（“Radio Highlights,” *Nippon Times*, May 26, 1953）マルセル・グリリの記事 “The Infinite Variety of Marian Anderson” ではアンダーソンとレンブラントの類似性にもスポットが当てられている。

¹⁵³ 中村は、16歳のときにニューヨーク市において演奏ツアーでNHK交響楽団と演奏した。(Ross Parmenter, “Japan’s NHK Symphony in Local Debut,” *New York Times*, November 2, 1960). アンダーソンは、演奏ツアーの通訳者、水原文枝に中村の演奏会に行けなかつたことが残念であると書き綴っていた。（Marian Anderson to Fumie Mizuhara, carbon copy, NHK, Tokyo, November 11, 1960, folder 4160, box 65, Anderson Papers）。

¹⁵⁴ 大田黒元雄 『音楽よもやま』 昭和32年7月, 東京: 音楽之友社, 213-214頁. 大田黒元雄(1893-1979)は、第二次世界大戦前、戦後を代表する日本の音楽評論家であった。

¹⁵⁵ Grilli, “Infinite Variety.” マルセル・グリリに関する伝記上の情報は、“Marcel F. Grilli, 83, Music Critic in Japan,” *New York Times*, September 23, 1990.を参照するとともに、彼の息子のピーター・グリリ（2019年7月18日のオージャへのEメール）の言及によって補足した。

アンダーソンの日記では、アンダーソンの東京滞在中にアンダーソンとグリリが頻繁に交流したことが書かれている—グリリは、空港での歓迎会へ参加し、続いてアメリカ大使館員のマーガレット・ウィリアムズと同行したお茶会のあと歓談（5月3日）、夕食会（5月21日）、そしてインタビュー（5月25日）に参加した。

¹⁵⁶ Grilli, “Singer and Woman.”

¹⁵⁷ Grilli, “Infinite Variety.”

¹⁵⁸ Grilli, "Speaking of Music."

¹⁵⁹ Ibid.

¹⁶⁰ "Delta Rhythm Boys Welcomed in Japan," *Nippon Times*, May 20, 1953. 以下も参照のこと。 "U.S. Band Expected," *Nippon Times*, August 30, 1953. Re Armstrong: "World-Famed Jazzman Arrives," *Nippon Times*, December 5, 1953. アームストロングとジョセフィン・ベーカーの来日は記事発表後に変更された。:「続々来日する音楽家・ベーカー、アームストロングら」朝日新聞, 1953年5月4日. ジョセフィン・ベーカーは、神奈川県でハーフの孤児たちがいるキリスト教系の孤児院、エリザベス・サンダース・ホームを訪問した。

¹⁶¹ 村田武雄 「訓練の美・デ・ポーア合唱団評」 『音楽芸術』, 1954年4月, 110-111頁.

¹⁶² 朝日新聞社編, 『写真でみる戦後日本- 10年の歩みを記録する』, 東京: 朝日新聞, 1955年, 143頁.

¹⁶³ 大田黒元雄 「世紀の黒人歌手——マリアン・アンダソンの歩んだ道」 『中学二年コース』第1巻、第3号, 東京: 学習研究社, 1957年6月, 158-161頁.

¹⁶⁴ 庄司浅水 「黒人の歌姫マリアン・アンダーソン」 『灯火をかけた十人の婦人たち』所収, 東京: さ・え・ら書房, 1959年, 169-184頁.

¹⁶⁵ マリアン・アンダーソン『マリアン・アンダーソン』 西崎一郎訳, 1959年6月, 東京:時事新書, 全252頁.原題は"My Lord, What a Morning".

¹⁶⁶ 古川博己 「マリアン・アンダーソン」 『黒人研究』9号所収, 1959年8月, 16-17頁. 以下の文献も参照のこと。 Tsunehiko Kato, "The History of Black Studies in Japan: Origin and Development," *Journal of Black Studies* 44, no.8 (2013), 829-45.

¹⁶⁷ Anderson, My Lord, 英語版の原文 244 頁, 邦訳版では 194 頁.

¹⁶⁸ 石橋幸増 「高校英語教科書の中の黒人」 『黒人研究』所収, 1978年12月, No.49, 8-10頁. 日本人の歴史上の記憶に刻まれるアンダーソンとしては、1961年1月に行われたジョン・F.ケネディ大統領就任式の国歌斉唱がある。この模様は世界中でテレビ放映された。執筆者大田美佐子の義母、瀧井美子(1941年生まれ、福岡在住)をはじめ、アンダーソンが歌った姿を記憶している日本人は多い。

¹⁶⁹ 小倉友昭 「黒人音楽家の劣等感と優越感」 『音楽の友』19(4), 1961年4月号, 142-43頁.

¹⁷⁰ 木村英二、堀内修 「新西洋音楽事情——黒人オペラ歌手にまだ差別はあるのか」 『レコード芸術』6(381), 1982年6月号, 51-56頁.

¹⁷¹ 上地隆裕 「黒人たちのクラシカル音楽——アメリカ楽壇に新しい流れを作るエボニーの作曲家たち」 『音楽現代』27(18), 1997年12月号, 51-56頁.

¹⁷² マリアン・アンダーソンから水原文枝への私信、1953年7月29日。folder 3775, box 59, Anderson Papers. 手書きの手紙を後でタイプされた後郵送されたか、もしくはこの手紙自体、郵送されなかつたかのどちらかである。

¹⁷³ 水原文枝からマリアン・アンダーソンへの私信、1953年6月18日。Fumie Mizuhara to Marian Anderson, June 18, 1953, folder 3775, box 59, Anderson Papers. この手紙の一部は、一語一語転記されている。

¹⁷⁴ NHK 開局 30 周年(1955)を祝うためにマリアン・アンダーソンが録音した肉声のカセットテープ。cassette MA 261, Marian Anderson Collection of Miscellaneous Sound Recordings, Anderson Papers.